

983

983-cG24a-Z



*00226023 *

岩

紅 い 花

他 四 篇

ガルシン 作
神 西 清 譯

岩波書店



岩波文庫

1565

紅 い 花

他四篇

ガルシン作
神西清譯



岩波書店

983.cG24aZ

8

目次

目	紅い花	五
目	四日間	三七
目	信 號	六五
目	夢がたり	八七
次	アッタレーア・プリンケプス	九九
	あとがき	一一九



226023

紅
い
花

イヴァン・セルゲーヴィチ・トゥルゲーネフの記念に



「畏くも天の下しろしめす皇帝、ピョートル一世陛下の御名代として、余は本願狂院の査園を

宣す!

甲高い、耳がびんびんするやうな大音聲で、そんな文句が述べ立てられた。インクの汚點だら

けの机に向かつて、ぼろぼろの大きな帳簿にその患者の名を書き込んでゐた病院の書記は、思はず微笑を浮かべてしまった。だが患者を護送して來た二人の若者は、にこりともしなかつた。二晝夜といふものまんじりともせず、この狂人と面と向かひ合つて汽車に揺られた擧句に、ここまで連れて來たのだから、立つてゐるのもやつとなのである。降りる一つ手前の驛で狂氣の發作がひどくなつたので、何處やらで狹窄衣を手に入れて、車掌や憲兵に手傳つて貰つて患者に着せたのだつた。そのまま彼をこの町まで運び、いまこの病院に送りとどけたところである。

見るも怖ろしい姿だつた。發作の時ずたずたに裂いてしまつた鼠色の服のうへから、刮り込みの大きいごはごはのズツクの狹窄衣が、ぴつちりと胴體を緊めつけてゐる。長い袖が、兩腕をぎゅつと胸の上に十文字に組ませ、背中できくり上げてある。眞赤に充血した兩眼は大きく見ひら

かれ（これで十日のあひだ一睡もしないのだ）、じつと動かぬ懐火のやうに燃えてゐる。神経性の痙攣が下唇の端をびくびくと引つ攣らせ、くしゃくしゃになつた縮れ髪が、まるで蠶のやうに額に垂れかかつてゐる。さうして事務室の隅から隅へづしづしと足早に歩き廻つて、探るやうな眼つきで書類のはいつた古戸棚や油布張りの椅子をじろじろ眺めたり、時には護送人の方をちらりと見たりする。

「病棟の方へ御案内して。右の方です。」

「僕は知つてゐる、知つてゐるよ。去年も君たちと一緒に来たことがあるからな。僕らはこの病院を檢閲したんだよ。僕は何もかもすつかり知つてゐるんだから、さう易々とは騙されんぞ。」

患者はさう言ふと、扉口の方へくると向き直つた。看視人がその前の扉をあけてやると、相變らずしづしと足早に、しかも決然たる足どりで、狂つた頭を高々と反らしながら事務室を出て行つたが、右へ折れると今度は殆んど蹶足で、精神病患者の病棟の入口までやつて来た。護送人たちもやつと追ひついて行つたほどだつた。

「ベルを押して呉れ。僕には押せん。君たちに両手を縛り上げられちまつたからな。」

番人が扉をあけると、一行はそのまま病棟へ歩み入つた。

それは昔の役所風の建て方をした、大きな石造の建物であつた。大廣間が二つあつて、一つは

食堂に、もう一つは穩やかな患者の共同病房になつてゐる。廣い廊下が走つてゐて、庭の花壇へ下りる玻璃扉が^{ガラス}ついてゐる。それから患者の入れてある單獨病房が二十ばかり——ざつとかうした間どりが一階を占めてゐる。一階にはまだそのほかに暗い部屋が二つあつて、一つは毛蒲團をいちめんに張り廻し、もう一つは板張りだが、いづれも兇暴性の患者を收容するのである。それから圓天井のついた巨きな陰氣な部屋——これは浴室である。二階は婦人患者が占領してゐる。そこからは調子の外れた噪音が、唸り聲や苦痛の叫びで引き裂かれながら、階下まで傳はつて來るのだつた。この病院の定員はもともと八十名なのだけれど、近隣の數縣をこころ一つで掛け持ちしてゐるので、患者の收容數は三百人にも及んでゐた。手狭まな病室ごとに寢臺が四つか五つは入れてある。冬は患者を庭へは出さないし、鐵格子の外の窓はみんなびつたりと閉ざしてしまふので、病院の中はたまらない息苦しきであつた。

新來の患者は浴槽のある部屋へ連れて行かれた。健康な人間にさへ、この部屋の空氣は重苦しい印象を與へまいものでもないのに、ましてや常軌を逸し興奮しきつた想像力の持主には、尙更その作用はひどかつた。それは圓天井のついた大きな部屋で、石を疊んだ床はべとべとしてゐて、明りは片隅にあるたつた一つの窓からしか射し込まない。壁と圓天井とは赤黒い塗料で塗り上げられ、垢と埃で黒ずんでゐる床には、まるで二つの橢圓形の穴に水を張りでもしたやうに、石の

浴槽が二つ、床面とすれすれに嵌め込んである。途方もなく大きな銅製の爐が、湯沸かし用の圓筒形の鑪かまや、そのほか銅管だの活栓かっせんだの一切の装置を具へて、窓と反対側の一隅を占めてゐた。さうしたものが皆んな、病的な頭腦にとつては異常に陰慘で幻想的な性質を帯びてゐるところへ、湯番をしてゐる肥つたウクライナ人とせいかあたまがまた、つひぞ口を利いた例のないむつり屋と來てゐるので、その陰氣な顔つきが彌いひがうへにも部屋の印象を暗くするのであつた。

この怖ろしい部屋に連れて來たのは、患者を入浴させて、この病院の醫長の療法にしたがつて頸筋に發泡膏を塗布するためであつたが、部屋の様子を一目みると、彼は恐怖と忿怒に取つ憑かれてしまつた。途方もない想念が、次第に怪奇の度を増しながら、あとからあとからと頭の中で渦を卷いた。一體これは何だらう？　むごたらしい邪宗改めの法廷か？　仇敵どもが彼を亡きものにしようと思ひ定めた祕密の刑場か？　ひよつとしたらこれが地獄ぢやあるまいか。しまひには、これは何かの拷問なのだといふ想念が浮かんた。必死になつて抵抗する彼を、寄つてたかつて裸かにした。ところが病氣のせるで二人力になつてゐた患者は、幾人かの看視人の手を苦もなく振りほどいてしまひ、相手は勢ひ餘つて床ゆかべたへつんのめつてしまつた。やつと四人がかりで押し倒して、手とり足とり温湯の中へつつ込んだ。それが患者にはくらくらに煮え返つた熱湯と思はれ、その狂つた腦裡を、煮え湯や灼熱した鐵棒を使ふ拷問についての脈絡のないきれぎれの

考へが、稻妻のやうに閃めき過ぎた。湯にむせ返つて、看視人たちにしつかり抑へつけられた手足を痙攣的にもがきながら、喘ぎ喘ぎ、何やら取留めのないことを喚き立てるのだつた。それは、自分の耳で實際に聞いた人でない限り、想像もつかぬやうな叫喚であつた。祈りの文句もあつたし、呪詛の叫びもあつた。精根つきるまで喚きつづけてゐたが、やがてしまひには熱い涙をぼろぼろ零しながら、それまで喚き立ててゐた言葉とは何の脈絡もない文句を、小さな聲で唱へるのだつた。「聖なる大殉教者ゲオルギイ。この肉體はあなたの御手にお任せします。だが魂は——いいや、厭です、厭です。」

看視人たちはまだ抑へてゐる手をゆるめなかつたけれど、患者はそのうちにすつかり鎮まつてゐた。温浴と頭に當てがつた氷嚢が、利き目をあらはしたのだつた。ところが殆んど氣を失つてゐる彼を湯の中から引き上げて、發泡膏を塗布するため腰掛に掛けさせる段になつて、残つてゐた力と狂つた想念とが、またしても文字どほり堰を切つて迸つた。

「何故そんな、何故そんなことをする」と彼は喚いた、「俺は誰にも悪いことをした覚えはないぞ。何の罪でこの俺を殺すんだ。おとお、おとお、主よ！　おとお、我れに先んじて十字架を負ひ給へる主よ。お願ひです、お救ひ下さい。……」

頸筋へ來た焼けつくやうな感じが、彼を必死にもがき狂はせた。看視人たちは手の付けやうが

ないので、途方に暮れてしまった。

「仕方がない」と施術にかかつてゐた看護卒が言つた、「摩擦せにやならん。」

この何でもない言葉に、患者は慄へ上がつてしまつた。「摩擦だと……何をこする、誰をこする？ この俺をだ！」と彼は考へ、死なんばかりの怖ろしさに兩眼をつぶつた。看護卒はこはのはのタオルの兩端を握ると、力いつばいに壓しつけながら、勢ひよくごしごしと頸筋をこすつた。發泡膏が剥げ落ち、頸の上皮がすりきれて、赤剥けの擦り傷があとに残つた。平靜な健康人にとつてさへ我慢のならぬこの施術の苦痛は、病人にはこの世の終りかと思はれた。必死の力を滿身にこめてぐいと一と踏張り、看視人たちの手を振りもぎつた途端に、赤裸かのからだは石疊のうへにころろと轉がつた。彼は首を斬り落とされたかと思つた。喚かうとしたが聲が出ない。彼は失神したまま病床に運ばれ、そのまま死んだやうな深い長い睡りに落ちた。

エ

彼が氣がついたのは眞夜中であつた。あたりはしんとしてゐる。隣りの大きな部屋からは患者たちの寢息が聞こえて来る。どこか遠方で、その一夜を眞暗な部屋に押し込まれた患者が、單調

な奇妙な聲で自分を相手に喋つてゐる。かと思ふと二階の婦人病棟からは、嗚れた女聲中音が何やら野卑な歌を唄つてゐるのが聞こえてくる。病人は耳を澄ましてこれらの聲に聴き入つてゐた。手足から腰から、そこらぢゆうが怖ろしく懈く、ぐつたりと力の抜けた感じだつた。頸筋がづきづき痛んだ。

『俺は何處にゐるんだらう、どうしたんだらう？』といふ考へが浮かんだ。と遽かに彼の脳裡には、この一と月の自分の生活が不思議なほどありありと描き出されて、自分が病氣なこと、それも何處が悪いかといふことまでが、はつきり悟られたのだつた。さまざまな途方もない想念や言葉や行爲が思ひ出され、それが總身を慄へあがらせた。『だかもう濟んだのだ。ああ有難い、もう濟んでしまつた！』と呟くと、彼はまた睡りに落ちた。

鐵格子の嵌まつた窓は開け放してあつて、大きな建物と石の塀に挟まれた細い露路に面してゐた。この袋小路にははいつて来る人もないので、名も知らぬ野生の灌木の叢や、ちやうどその季節に美しい花をつける紫丁香花やが、一面にはびこり繁つてゐる。……繁みの向ふには、窓と丁度むかひ合はせに、石の塀が黒々とそそり立つてゐた。宏大な庭園の樹立が、高い梢に月光を浴び、また月かけを透かせながら、石塀ごしに覗いてゐた。右手には病院の白い建物がそびえ、鐵格子の嵌まつた窓々が、あかるく内側から照らされてゐる。左手は——月の光に眩しいほど白く

浮きあがつた、死亡室の盲ら壁である。月光は窓の鐵格子をとほして室内の床こまに落ちて、寢臺の一部と、眼をつぶつた病人の疲れきつた蒼い顔とを照らしてゐた。いま見ると狂氣じみたところは少しもなかつた。それは疲れ果てた人に来る、夢も見ず身じろきもせず、息さへも殆んど通はぬ深い睡りであつた。ほんの數瞬のあひだ、彼はまるで健康な人のやうに、完全な知覺をもつて眼ざめたのである。やがて朝になれば、またもとの狂人として寢床を起き出ようがため。

三

「御氣分はいかがです？」と翌る日、醫者が彼にたづねた。

たつたいま眼をさましたばかりの病人は、まだ毛布にくるまつてゐた。

「頗るよろしい」と跳ね起きてスリッパを穿き、寢間着をぎゆつと摺みながら彼は答へた、「實によろしい。だがたつた一つ、そらここが——」
と自分の頸を指さして、

「痛くつて頸が廻せないんです。まあそんな事はどうでもいい。あれが分かりさへすりや文句はないのさ。ところが僕は分かつてゐるんだ。」

「いま何處にをられるのか御存知ですか。」

「そりや勿論、ドクトル。僕は癲狂院にゐるのです。だが、あれが分かつてしまへば、そんなことは全くどうでもいいんです。全くどうだつていいことですよ。」

醫者は患者の眼にじつと見入つてゐた。見事に手入れの行き届いてゐる金色の髻、金縁眼鏡こしにじつと見てゐる落ち着き拂つた青い眼——醫者の美しい、嗜みのいい顔はびくりともせず、見透し難いものがあつた。彼は觀察してゐたのである。

「何故さう僕を見詰めるのです？ 僕の心の中なんかとても讀めるもんですか」と患者は言葉をついだ、「しかし僕にはあなたの心の中が讀める。何故あなたは悪いことをするのです？ 何故あなたは不幸な人達をこんなに集めて、ここに監禁して置くのです？ 僕のことはどうでも宜しい、僕は一切を見抜いて泰然としてゐるんだから。しかしあの連中はどうです？ ああした苛責が一體何になるのです。自分の魂には偉大なる思想、萬有に相通する思想が存するといふことを達觀した人間にとつては、何處に住まうと何を感じようと同じことです。生死すらも問ふところではありません。……さうぢやないですか？」

「さうかも知れませんねえ」と醫者は答へて、患者の姿がよく見えるやうに、部屋の一隅の椅子に腰をおろした。患者は大きな馬革のスリッパをべたべたいはせ、荒い赤縞に大きな花模様の

ついた木綿の寝間着の裾をはためかせながら、勢ひよく隅から隅へ歩き廻つてゐる。

「で、僕にはその思想がある！」と患者は叫んだ、「それを発見したとき、僕は生まれ變つたやうな氣がしました。感覺は鋭敏になり、頭腦は今までにないほどよく働く。これまでは推理や臆測の長い道程を経て到達したことを、今では直覺的に認識する。哲學が作り上げたものを、僕は現實的に把握したのです。空間と時間とは擬設フィクショナルである——といふ大いなる觀念を、僕は身を以て體驗しつつある。僕はあらゆる世紀に生きてゐる。僕は空間を絶した所に生きてゐる。到る處に生きてゐるとも言へ、また何處にもゐないとも言へませう。だからあなたが僕をここに監禁して置かれようと、或ひは解放なさらうと、僕が自由の身であらうと束縛されてゐようと、僕にとつては同じことなんです。ここには僕同様の人々がまだ數人ゐることを僕は認めました。しかしその他の有象無象にとつては、かういふ状態は怖ろしいものです。何故あなたは解放してやらないのですか。一たい誰に必要が……」

「今あなたは」と醫者は遮つた、「時間と空間を絶したところに生きてゐると言はれましたわ。しかし、あなたと私が現にこの部屋に居り、そして今が」と時計を出して、「一八〇〇年五月六日の十時半であるといふことは、否定する譯には行きません。この點はどうお考へですか。」

「別にどうとも考へてゐません。何處にゐようと何時いつに生きようと、僕には同じことなのです。僕にとつて同じことである以上、つまり『僕』といふものが、隨處にあり隨時にあるといふことになるではありませんか。」

醫者はちらつと薄笑ひを漏らした。

「珍しい論理ですねえ」と彼は立ち上がりながら言つた、「或ひはあなたの言はれる通りかも知れませんが。ではまた。葉巻をひとついかがですか？」

「有難う。」——彼は立ちどまつて葉巻を取ると、神経質にその端を噛み切つた。「これは思考の助けになる」と彼は言つた、「これは世界だ、小宇宙だ。一方の端にはアルカリがあり、他の端には酸がある。……互ひに對立する原理が中和してゐる世界の平衡状態も、やはりこの様なものだ。……さやうなら、ドクトル！」

醫者は回診をつづけた。患者の大部分はそれぞれの病床の傍に直立して、彼を待ち受けてゐた。どんな役所の長官でも、精神病醫がその患者から受けるほどの敬意を、部下から受けることはないのである。

さて例の患者はひとりになると、病室の隅から隅へ、せかせかと落着きのない歩みをつづけた。お茶が運ばれて來ると、彼は立つたまま、把手トウのついた大コップを二た口で空にし、ほとんど

瞬くひまに白パンの大きな塊まりを平らげてしまった。それから病室を出て、數時間といふもの小休みもなしに、例のづしづし云ふ足早な步調で、建物の端から端へと歩きつづけた。その日は雨模様だったので、患者たちは庭へ出されなかつた。助手が新來の患者を捜しに來て見ると、他の患者が廊下の外れを指さして見せた。彼はそこに佇んで、庭へ出る玻璃扉のガラスにびつたりと顔をつけたまま、じいつと花壇に見入つてゐた。罌粟の一種の、異様に鮮やかな眞紅の花が、彼の注意を惹きつけたのである。

「體重を量りますからいらして下さい」と、彼の肩に觸れながら助手は言つた。

そして患者がくるりと顔を振り向けたとき、助手はぞつとして、殆んどたじたじとなつた。それほどに兇暴な敵意と憎悪の色が、狂つた眼の中に燃えてゐたのである。しかしそれが助手だと分かる、彼は直ぐさま顔色を改めて、まるで深い物思ひに沈んでゐるかのやうに一言も口を利かずに、おとなしく後からついて來た。醫者の診察室にはいると、患者は言はれぬ先に自分から、十進法の目盛りのついた小型な秤の臺座に立つた。助手は體重を取ると、帳簿の彼の名のところに一〇九露封度と記入した。翌日には一〇七になり、三日日には一〇六になつた。

「この調子で行つたら、あの患者はとてももつままい」と醫者は言つて、出来るだけいい食餌を與へるやうに言ひ附けた。

だがそれにも拘はらず、また患者の異常な食欲にも拘はらず、彼は日に日に瘠せ衰へて、助手が日毎に記入する露封度の數はだんだん少なくなつて行くのだつた。患者は殆んど睡眠をとらず、來る日も來る日も終日小休みもなしに動き廻つてゐた。

四

彼は癲狂院にゐることを意識してゐた。自分が病氣だといふことさへ意識してゐた。時々はその最初の晩のやうに、終日の狂ほしい運動の後に來た靜寂のさなかで、四肢のつきつきする鈍痛と、頭の怖ろしい重さを感じながら、それでも完全に意識を取り戻して眼さめることがあつた。恐らく深夜の靜寂のなかでは外界の印象が闕けてゐること、また恐らくは眼をさましたばかりの人間の腦髓の働きの鈍さが、さうした瞬間彼に自分の状態をはつきりと認めさせ、あたかも健全であるかのやうな相を呈させるのであらう。しかし夜が明けると、射し入る光とともに、また病院の生活の眼ざめとともに、またしても様々の印象が大波をなして彼を取り圍むのだつた。病んでゐる腦髓はそれらの印象をもて扱ひ兼ねて、彼はまたもや狂人になつてしまふのだ。彼の状態は、正しい判断と妄想との奇妙な混合物だつた。彼には、自分の周りにゐる者が皆んな病人だと

いふことは分かつてゐたが、それと同時に彼等の一人一人に、自分が曾て知つてゐた、或ひは本で讀んだことのある、乃至は噂に聞いたことのある誰かれの顔を——それら漸く密やかに薄れ隠れようとしてゐる、または全く忘却の狭霧に蔽はれてしまつてゐる面影を、見出すのであつた。で病院には、あらゆる時代、あらゆる國々の人が住んでゐた。生きてゐる人も死んでゐる人もあつた。その名一世に鳴り響いた人々も、武勇の譽れ天下に高い人々も、また此の間の戦争で死んで、ふたたび甦つて來た兵士もゐた。彼は、地上の一切の力を集中させた或る妖しい魔法の輪の中にある自分を見、思ひ傲つた恍惚のなかで、自分をその輪の中心だと思つた。彼の病院仲間みんな、ある仕事を遂行するため此處に集合したのであり、その仕事は彼の胸には漠然と、地上の惡の絶滅を期する雄大な一大事業なのだと思ひ描かれた。具體的に果たしてどういふ事をする事業なのかは、彼にも分からなかつたが、彼はそれを遂行するに充分な力が身内にあることを感じてゐた。彼は他人の心の中を讀むことができた。事物にその全歴史を見ることもできた。病院の庭の楡の大樹は、その過去の一切の傳説を彼に物語るのだつた。病院の建物は事實かなり昔に建てられたものではあつたが、彼はそれをピョートル大帝の造營であると考へ、帝がボルタヴァの役の當時に住まはれたものと確く信じてゐた。それを彼は四方の壁や、剝げ落ちた漆喰や、庭に轉がつてゐる煉瓦や陶瓦の破片の上に讀んだのだ。家屋と庭園の一切の歴史は、それらのもの

の上に記されてゐた。彼は死亡室の小さな建物に、とうの昔に死んでゐる何十人何百人の人間に住まはせ、その地下室から庭の片隅に面して明いてゐる小窓に、じつと眼を凝らすのだつた。すると、その虹色をした汚れた古硝子のうへの光の亂反射の中に、曾て生あるものとして、または肖像畫として彼の眼に觸れた、見覚えのある面影が浮かぶのであつた。

そのうちに澄み渡つた晴天の日々が來た。患者たちは終日庭に出て外氣のなかで過ごした。その庭の彼等の領域は廣くはなかつたが、樹々がよく生ひ繁つて、植ゑられる限りの場所には一面に草花が植わつてゐた。監督は少しでも勞働のできる者にはみな庭で働くやうに強ひてゐたので、彼等は日ねもす小徑を掃いて砂を撒いたり、自分たちの手で犂き起こした花壇や、胡瓜や西瓜や甜瓜の苗床の草むしりをしたり、水をやつたりしてゐた。庭の隅にはよく繁つた櫻の林があつた。それに沿つて楡の並木が連らなつてゐた。中央の小さな築山の上には、庭ぢゆうで一ばん美しい花壇が作つてあつた。鮮やかな色の花々が上段を縁どつて生え、その眞中には、豐滿な、珍らしいほど大輪の、赤い斑點のある黄ダリヤが、今を盛りと咲き誇つてゐた。このダリヤは一段と小だかいところ位にして、庭全體の中心をなしてゐたので、多くの患者がこの花に何かしら神祕な意味を附してゐることは、一見してそれと見てとられた。新來の患者にもやはり、その花は尋常一様のものとは言ひ切れぬ或るもの、何かしら庭園と家屋の守護女神像のやうに思はれるのだつ

た。あらゆる小徑の兩側にも、患者達の手で花が植ゑてあつた。そこには小露西亞地方の庭々で見られるありとある花があつた。丈なす薔薇、色鮮やかな衝羽根朝顔、小さな淡紅色の花をつけた見上げるやうな苺の叢立ち、薄荷、孔雀草、凌霄葉蓮、それから罌粟。またその庭には、昇降口のぢき傍に、何か特別の種類と見える罌粟が三株はえてゐた。普通の罌粟よりもずつと花が小さく、その眞紅の色の並々ならぬ鮮やかさが、普通には見られぬ特徴であつた。入院後の第一日に、例の患者が玻璃扉ごしに庭を眺めてゐたとき、その眼を驚かしたのはこの花なのであつた。はじめ庭に出た彼は、昇降口の段を下りようともせず、何よりも先づこの燃えるやうな花を眺めた。花はたつた二つしかなかつた。それは他の草花から離れて、偶然この雑草の抜いてない場所に生えたので、よく茂つた藜や、名も知らぬ丈の高い南方の雑草が、ぎつしりと周りを取り圍んでゐた。

患者達は順ぐりに扉から外へ出た。扉口には看視人が一人立つてゐて、額に赤十字の印のついた木綿編みの厚手の白い患者帽を、めいめいに手渡すのだつた。この帽子は戦地に行つて來たもので、競賣で買ひ入れたのである。とはいへ、例の患者がこの赤十字の印に、特別な神祕な意味を附してゐたことは言ふまでもない。彼は帽子を脱いで十字の印を眺め、それから罌粟の花を眺めた。花の方が鮮やかだつた。

「奴の方が勝つてゐる」と患者は言つた、「だがまあ見てゐるよ。」

そして彼は昇降口を離れた。あたりを見廻し、背後に立つてゐる看視人の姿には氣づかずに、彼は花壇を一跨ぎしてその花の方へ手を伸ばしたが、摘みとる勇氣は出なかつた。まるで得知れぬ力の何かしら強烈な流れが、その眞紅の花弁から發して、彼の全身を貫きとほしてもしたやうに、彼はまづ差し伸べた手に、やがては全身に、焼けつくやうな感じと、刺すやうな痛みを感じたのである。彼はぐいとにじり寄つて、花とすれすれまで手を伸ばしたが、花は人命を奪ふやうな毒氣を發散して、防いでゐるやうに彼には思はれた。彼は眩暈がして來た。彼が最後の死にもぐるひの努力をして、やつとのことで莖に手をかけた時、にはかにどつしりと重い手が彼の肩にかかつた。看視人が彼を捉へたのだ。

「爺つてはならん」とウクライナ人の老人が言つた、「花壇へはいつてもならん。ここには君等のやうな氣ちがひが一杯ある。それに一本づつ爺られたら、庭ぢゆうが坊主になつてしまふからね」と彼は、患者の肩をつかまへたまま、諭すやうな口調で言つた。

病人は彼の顔を眺め、無言のままその手を振りほどくと、興奮して小徑を歩いて行つた。「ああ、哀れな奴等だ」と彼は思つた、『お前等は眼が見えないのだ。彼奴をかばふほどに、お前等は盲目果ててゐるのだ。だが俺は、どんなことがあらうと、きつと彼奴をやつつけて見せる。今日

が駄目なら明日こそ力競べをしてやらう。それで俺が死んだとしても、どつちみち同じことぢやないか。……』

彼は日がつぷりと暮れるまで庭をぶらついて、患者仲間と交際を結んだり、または對談者がみなでんでに、途方もない摩訶不思議な言葉で自分の狂つた考へを言ひ表はして、それに對する相手の返答だけを聞くといつた風な、奇妙な會話を交はしたりした。病人はいまこの患者と歩いてゐたかと思ふと、すぐまた別の患者と道連れになつて、日が暮れる頃には、彼が自分に言ひ聽かせた文句によると『用意はすつかり出來てゐる』ことについて、ますます確信を深めるに至つた。間もなく、間もなく鐵の格子は崩れ落ち、これら監禁されてゐる人々は残らずここを出て、地上のありとある涯へと飛んで行く。そして全世界は戦き震へ、着古した衣をかなぐり棄てて、新しい驚くべき美しさを以て立ち現はれる。……彼は花のことは殆んど忘れてしまつてゐたが、庭を去つて昇降口を上がらうとしたとき、黒ずみかけて既に露を宿しはじめた雑草の茂みの中に、まるで二つの紅い炭火のやうな罌粟の花が、あらためてまた彼の眼についた。すると病人は患者の群から後れて、看視人の背後うしろに佇み、ままと恵まれた瞬間をつかんだのだつた。誰ひとり、彼が花壇を飛び越え、花を驚擲おどろみにして、いそいで胸の肌衣の下に匿したのを見たものはなかつた。冷え冷えと露を含んだ草の葉が彼の肉體に觸れたとき、彼は死人のやうに蒼ざめて、

恐怖のあまり眼を大きく見開いた。冷汗が彼の額に滲み出た。

病院にはランプがともつた。晩食を待つあひだ、患者の大部分は寢床に横になつてゐたが、幾人かの躁狂性の患者はせかせかと廊下や廣間を歩いてゐた。花を抱いた患者もその一人だつた。十文字に組んだ兩腕を、ぐいぐいと痙攣的に胸に壓しつけながら、彼は歩いてゐた。胸に匿した草花を壓し潰してしまひたい、みじんに揉みしだいてしまひたいと思つてゐるやうだつた。ほかの患者が向ふから來ると、彼は着物の縁へりの觸れ合ふのを懼れて、遠廻りに避けて通つた。『傍へ寄らんで呉れ、傍へ寄らんで呉れ！』と彼は叫んでゐた。しかし病院の中では、そんな大音聲に一々注意を向ける人はまづ無かつた。で彼はいよいよ足早に、ますます大股になりながら、何かしら激しい怒氣を含んで、一時間二時間と歩き廻つてゐた。

「へとへとにして呉れるぞ。息の根をとめて呉れるぞ！」と彼は、空ろな聲でさも憎さげに言ふのだつた。

ときどき彼は齒ぎしりをしてゐた。

食堂に晩食が出た。卓子掛のない大きな食卓の列の上には、金の蒔繪のある色塗りの木鉢がそれぞれ幾つかつつ置かれて、その中に水つばい黍粥きんぴらが盛つてあつた。患者達は長い腰掛に坐つた。黒パンが一片つつ配られた。八人ほどが一組になつて、おもやひの鉢から木匙で食べるのだつた。

上等食を支給される幾人かの患者には、別室で食事が出た。看視人によつて自分の病室へ呼び込まれた例の患者は、その看視人が運んで来た一食分を急いで一呑みにしてしまふと、それでは満足がゆかずに共同食堂へやつて来た。

「僕もここに坐らせて下さい」と彼は監督に言つた。

「もうお済みぢやなかつたのですか」と、お代りの粥を木鉢に注ぎながら監督はきき返した。

「僕はとても空腹なんです。それに僕はうんと精分をつける必要がある。僕の命を繋いでゐるのは食物だけなんです。御存知の通り、僕は一睡も出来ないのですから。」

「ぢやまあ、たんとお食いなさい。タラス、この方に匙とパンをお上げ。」

彼は木鉢の一つに向かつて坐ると、更にびつくりするほど大量の粥を平らげた。

「さあ、もう澤山、もう澤山」と、一同が食事を了へたとき監督はさう言つたが、病人はまだ腰を上げずに鉢の上へのしかかつて、片手では粥を掬ひ、のこる片手では胸をしつかり抑へてゐた。「お腹を毀しますよ。」

「ああ、僕にどれほどの力が、どれほどの力が要るのか、あなたが分かつて下すつたらなあ、ではお別かれします、ニコライ・ニコラーエヴィチ」と彼は食卓を立ちながら、監督の手をぎゅつと握りしめて言つた、「御機嫌よう。」

「一たい何處へいらつしやるのです？」と監督は微笑しながら訊いた。

「僕ですか？ 別に何處へも。此處にをりますよ。だが明日は恐らくお目にかかれますまい。色々と御親切に有難うございました。」

さう言ひながら、もう一ぺん監督の手を固く握りしめた。彼の聲は頼へ、眼には涙が浮かび出た。

「まああなた、落ち着いて下さい」と監督は答へた、「何だつてそんな陰氣なことを考へるのですか。お部屋に歸つて横におなりなさい。そしてぐつすりお寐みなさい。あなたはもつと睡眠を攝らなくちやいけませんよ。よく眠りさへすれば、直きに快くなりますよ。」

病人は咽び泣いてゐた。監督は顔をそらすと、食事の残りを早く片づけるやうに、看視人たちに命じた。それから半時間ののちにはもう、病院の中はすっかり寢靜まつてゐたが、ただ一人、角の部屋の寢臺の上に、着替へもせずに横たはつてゐる患者だけは例外だつた。彼は熱病患者のやうにがたがたと頼へ、前代未聞の怖るべき猛毒に犯されたと自ら考へてゐる胸を、痙攣的に緊めつけるのだつた。

彼は一晩ぢゆう眠らなかつた。彼があの花を摘み取つたのは、さうした行爲の裡に自分の遂行せねばならぬ大いなる業を見たからだつた。玻璃扉ごしにはじめて見かけた時、彼の注意はその眞紅の花舞に惹きつけられてしまつた。そして彼には、この刹那を境にして自分が、この地上で自ら爲遂げなければならぬ事の何かを、完全に悟つたやうな氣がしてゐた。あの燃えるやうな紅い花に、世界のありとある悪が聚まつてゐたのだ。彼は罌粟からは阿片の採れることを知つてゐた。恐らくはこの想念が枝葉をひろげ、異様な形をとつて、凄まじい怪奇な幻影を彼に作り上げさせたのであらう。彼の眼にはその花は、ありとある悪の凝つて成つたものと映じた。その花は、罪なくして流された人類の血を一滴もあまさず吸ひとり（だからこそあんなに眞紅なのである）、人類のあらゆる涙、あらゆる膽汁をも吸ひとつたのだ。それは神祕な怖るべき存在であり、神の反對者であり、さも内氣さうな無邪氣さうな風を装ふ暗黒神であつた。奪り取つて、殺してしまはねばならないのだ。しかもそれだけではまだ足りない。それが息を引きとる際に、身内の凡ての悪を世界へ吐きだすやうなことがあつてはならないのだ。だからこそ彼は、それを自分の懐にじつと押し匿してゐたのである。彼は、夜が明ければその花が、一切の魔力を失ふことと期待し

てゐた。その悪は彼の胸に、魂に乗り移つて、そこで彼に征服されるか彼を征服するか、どつちかなのである。それが彼を征服することになれば、彼自身は滅びる、死ぬ。しかし彼は名譽ある戦士として死ぬのだ。のみならず、未だ曾て誰一人として、世界のありとある悪を相手に一舉に闘ひを決しようとした者がない以上、彼は人類最初の戦士として死ぬのである。

「奴等にはあれが見えなかつた。俺にはちゃんと見えたのだ。どうしてあれが生かして置けよう。そのくらゐなら死んだ方がましだ。」

そして彼は、ぐつたりとなつて横たはつてゐた。幻想の生んだ、現實にはない闘ひではあつたが、それでも矢張りぐつたりと疲れ果てて。——朝になると、助手は息もたえだえの彼を見出した。がそれにも拘はらず、暫くすると興奮の力の方がうち克つて、彼は寢床から跳び起き、相變らず病院ぢゆうを駆けずり廻つて、今までにないほどの高聲と脈絡の無さまで、患者達と話をしたり獨り言をいつたりした。彼は庭へは出されなかつた。醫師は、體重が日まじに減つて行くのに、彼が相變らず一睡もせず絶えず歩き廻つてゐるのを見て、多量のモルヒネの皮下注射を命じた。彼は抗らはなかつた。幸ひにもこの時は、彼の狂つた想念がこの施術にびつたりと一致したのである。彼は間もなくとうとうと寐入つた。魔に憑かれたやうな運動は歇んだ。またあのせかせかした歩みの拍節から生みだされて、たえず彼につき纏つて離れなかつた轟くやうな樂旨も、

彼の耳から消え失せた。彼は自分を忘れ、一切の思考をやめて、摘み取らなければならぬ第二の花のことすら考へなくなつた。

しかしそれから三日すると、あつと思ふ暇もない咄嗟のうちに、老看視人の眼の前で彼はその花を摘みとつた。看視人は追つかけて來た。勝ち誇つたやうな悲鳴をあげながら、患者は病院へ駆け入つて、自分の部屋へとび込むが早いか、草花を胸に匿した。

「なぜ花を奪つたりする」と、後ろから駆け込んで來た看視人がつめ寄つた。が、その時にもう病人は腕組みをしたいつもの恰好で寢床に横たはつて、例の譚話を始めたので、急いで逃げる拍子に返し忘れた赤い十字の帽子を、黙つて彼の頭から取つただけで、看視人は部屋を出て行つた。そして幻想の闘ひがまた始まつた。病人はその花から、蛇に似た何本もの長いうねうねした流れをなして、悪がのたくり出るのを感じるのだつた。それは彼に巻きつき、四肢を締めつけ搾りあげ、その怖ろしい分泌物を彼の全身に滲み込ませるのだつた。彼は涙をぼろぼろ零しながら、敵に投げつける呪詛の文句の合間合間に神に祈つた。夕暮になると花は凋んだ。病人は黒ずんで來た草花を踏みにじつて、残骸を床から拾ひあげると、それを浴室へ持つて行つた。形も何もなくなつた青草の小さな塊まりを、石炭で眞赤に灼けてゐる爐の中へ投げ込むと、敵がじゆじゆつと云つて縮くれあがり、やがての果てにはふんはりした、雪のやうに白い一片の灰に化して

しまふまで、彼は長いこと見守つてゐた。ふうつと吹くと、何もなくなつた。

翌る日、病人の容態は目に見えて悪化した。げつそりと憔悴した頬、眼窩の奥へ落ち窪んでぎらぎらしてゐる眼、そして怖ろしいほど眞蒼な顔をした彼は、最早ふらふらと頼りない足どりで躓き躓き、愚かれたやうな歩みを續けながら、ひつきりなしに喋り立ててゐた。

「暴力には懇へたくないのだが」と科長がその助手に言つた。

「しかし先生、あの猛烈な運動だけは止めさせなければなりませんまい。今日の體重は九三露封度でした。この調子で行くと、二日たてば死んでしまひます。」

科長は考へ込んだ。——「モルヒネか？ クロラールか？」と半ば問ふやうに言ふ。

「昨日はもうモルヒネも利きませんでした。」

「縛れと言つて呉れ給へ。だが僕は、まづ助かるまいと思ふよ。」

六

そこで病人は縛りあげられた。狭窄衣を着せられ、幅のひろいズツクの帯で寢臺の鐵枠へしつかり結へ附けられて、彼は自分の寢床に横たはつてゐた。しかし運動性の狂躁は鎮まるところか、

却つて募る一方だつた。枷から自由にならうとして、彼は何時間もぶつ通しの執拗な努力を試みた。到頭しまひに、力一ぱいにぐいと突つ張ると、帯が一本きれて足が自由になつた。やがてもう一本の帯からも抜け出して、手を縛られたまま部屋のなかを歩き廻つて、兇暴な譯のわからぬ言葉を喚きはじめた。

「ひやあ、このやつがれ……」と、はいつて来た看視人が喚きたてた、「何たる悪魔が助けをつたぞな？ グリツユヤ、イヴァンヤ、いそぎ来うよう、抜け出をつたがな。」

彼等は三人がかりで病人に飛びかかつて、そこで長い格闘がはじまつた。それは攻撃する側にとつても厄介千萬なものだつたが、ましてや消耗した力の残りを振り絞つて防禦する方にとつては、やり切れない苦難であつた。とどのつまり彼は寢臺のうへに押し倒されて、前よりも固く縛り上げられてしまつた。

「君たちは自分でしてゐる事が分らんのだ」と病人は喘ぎ喘ぎ叫んだ、「君たちは滅亡に瀕してゐるんだぞ。僕は咲きかけてゐる三つ目の奴を見たんだ。今頃はもう彼奴め、用意ができた頃なんだ。頼む、この仕事を果たさせて呉れ。彼奴を殺さぬや、殺さぬや、殺さぬやならん。さうしたらすつかり片附くんだ、みんなが救はれるんだ。君たちに頼んでもいいが、これが出るのはこの僕だけなのだ。君たちはちよつと觸つただけでも死んでしまふ。」

「黙つとりなされ、若旦那や、黙つとりなされ」と、見張りのために寢臺の傍に居のこつた老看視人がいつた。

病人は急に黙り込んでしまつた。看視人達を騙さうと決めたのである。一日ぢゆう縛られたまんまだつたが、なほそのうへに、その一晚は同じ状態で置かれることになつた。病人に晩食を與へると、看視人は寢臺の下に何やら敷いて横になつた。一分後には彼はぐつすり寐入つてしまつたが、病人の方は仕事に取りかかつた。

寢臺の縦の鐵枠かまに觸れるやうに、彼は全身をねぢまげた。そして狹窄衣の長い袖の下に隠れてゐる手頸てのねがそれに觸ると、勢ひよくごしごしと袖を鐵てつに擦りつけはじめた。暫くすると厚いズック地ぢがすりきれて、食指がやつと自由になつた。さうなるともう仕事は手つとりばやく運んだ。健康な人にはとても信じられぬほどの巧妙さと、屈伸の自在さで、彼は背中で括りあげてある袖の結び目を解きはなち、狹窄衣を振りほどいてしまふと、長いことじつと看視人の鼻に耳を澄ましてゐた。が老人は正體もない。病人は狹窄衣をぬいで、寢臺を抜けだした。彼はもう自由の身だつた。彼は扉に試つてみた。内側から錠かぎがおりてゐる。錠は恐らく看視人のポケットにあるのだらう。老人に目をさまされては困るので、そのポケットを探ることは諦めて、窓から脱け出ようとして決心した。

静かな暖かい闇の夜であつた。窓はあけ放してあつて、星かげが黒々とした空にまたたいてゐた。彼はそれを眺め、自分の知つてゐる星座を見わけたり、何となく星たちが自分の氣持を理解し、同感して呉れるやうな風に見えるのを喜ぶのだつた。彼は眼を瞬かせながら、星たちが自分へ送つてよこす無限の光を眺めてゐた。それにつれて狂つた覺悟はますます強まつて行くのだつた。鐵格子の太い棒をねぢまげ、せまい隙間を這ひぬけ、灌木の生ひ茂つた露路へ下りたつて、それから高い石塀を乗り越えなければならぬ。そこでいよいよ最後の闘ひだ。そのあとでは——死んでもいい。

彼は素手で太い鐵棒を曲げようとして見たが、鐵はびくりともしなかつた。そこで彼は狹窄衣の丈夫な袖を繩に撚り、鐵棒の尖の槍になつてゐるところへ引つけて、全身の重みでそれらぶら下がつた。残つてゐる力の殆んどありつたけを振り絞つた死にも狂ひの努力の後で、槍先はやつと折れまがつて、狭い口があいた。肩や肘や、裸かの膝頭をすり剃きながら、彼は無理やりにその隙を抜けだし、灌木の叢を掻きわけて、石壁の前に立ちどまつた。あたりは静まり返つてゐた。終夜燈の明りが、巨きな建物の窓々を内側から鈍く照らして、その中には人影も見えなかつた。誰も彼に氣づいたものはないのだ。彼の寢臺の傍で番をしてゐた老人は、恐らくぐつすり眠つてゐるのだらう。星たちの優しく瞬く光が、彼の心臓にまで沁み透つてきた。

「もうすぐにお傍へ参ります」と、彼は空を仰いでささやいた。

最初の試みでずり落ちて、爪を剥がし、手や膝頭を血だらけにした彼は、都合のいい場所を捜しはじめた。石塀が死亡室の壁と接してゐる處に、塀からも壁からも幾つかの煉瓦が崩れ落ちてゐた。病人はその窩ほこを探り當てると、それを利用して石塀に這ひ登り、向ふ側に生えてゐる楡の枝につかまつて、幹をつたはつて靜かに地上に降りた。

彼は昇降口のそばの例の場所めがけて、轉ぶやうに走つて行つた。罌粟は花瓣を閉ちて、露のおりた草の上にくつきりと浮き出しながら、小さな頭を黒ずませてゐた。

「最後の奴だ」と病人はささやいた、「最後の奴だ。今日こそは勝つか死ぬかだ。だがもう俺にはどつちだつて同じことだ。暫くお待ちください」と彼は空を仰いで言つた、「もうすぐにお傍へ参ります。」

彼は草花を根ごと引き抜くと、ずたずたにちぎつて揉み潰し、それを握りしめたまま、もとの途を自分の部屋へ取つて返した。老人は眠つてゐた。病人は寢床のところまで辿りついたかと思ふと、そのまま氣を失つて寢床の上に倒れてしまつた。

朝になつて、人々は死んでゐる彼を見出した。安らかな明るい顔をしてゐた。薄い唇と、深く落ち窪んだ閉ざされた眼——その衰へ果てた相貌は、何かしら誇りかな幸福の色を浮かべてゐた。

彼を擔架に移したとき、人々は手を開かせて、紅い花を抜きとらうとした。がその手はもう硬直
しだしてゐて、彼は自分の戦利品を墓へと持ち去つたのである。

四
日
間

俺たちは森のなかを走つてゐた、弾丸がシュツシュツと鳴つてゐた、そいつに拂はれて小枝がばらばら降つて来た、俺たちは山櫛子の繁みを押しわけ掻きわけ突き進んだ——みんな憶えてゐる。射撃はますます激しくなつた。森の外れを透かしてみると、そここに何やら赤いものがある。射撃はますます激しくなつた。森の外れを透かしてみると、そここに何やら赤いものがある。第一中隊のまだほんの子供の兵隊が、『何だつて彼奴こつちの戦線へ紛れ込みやがつたんだ？』と、そんな考へがちつとしたつけがね、いきなり地面へべたりと兩膝つくつと、怯えあがつた大きな眼をして、振り向きざま黙つて俺の顔を見やがつた。見るとその口から、血がたらたらつと流れてゐた。いや、あれだけは忘れられんな。それからこれも憶えてゐるが、殆んど森の外れのところで、藪の繁みをひよいと見ると、その中にゐたんだ……敵がさ。そいつ三抱へもありさうな、肥つた土耳其兵だつた。こつちは瘦せつぼちの弱蟲だが、まつ向から躍りかかつて行つた途端に、何やらばあんと音がして、その時の感じぢや何かかう途轍もないでつかいものが、俺の傍をすつ飛んでつた。耳があんとしちまつたつけ。『こいつ撃つたな』と俺は思つた。ところが向ふは、わつと一こゑ悲鳴をあげると、山櫛子のやけに繁つた一叢へ背中を押つつけてもがいてゐる。その叢たちを廻つて逃げればいいものを、怖さのあまり

無我夢中で、棘々の枝のなかへめり込んどまつたのさ。ただ一打ちでそいつの銃を叩き落として、つづく一突きで何處とも知れず、ぐざりと銃劔をぶつ通した。唸るでもなし呻くでもなし、變てこな聲がしたつけ。それからまた俺は駆けだした。味方は『ウラト！』の喊聲をあげて、ばたばたと倒れる、ばらばらつと撃つ放す。忘れもしない、俺も五六發ぶつ放したつけが、それはもう森から野原へ出るところだつた。と、いきなり『ウラー！』の聲が一際ぐんと高まつて、俺たちは一齊に前進した。いや俺たちぢやない、前進したのは味方の兵で、俺はちやんと元の場所にあるんだ。をかしいなと思つた。それよりまだ變だつたのは、ぐるりの物が一時にすつと消えちまつた。関の聲も銃聲も、ぱつたり熄んでしまつたんだ。しんと靜まり返つたその中で、ただ何やら青いものが眼にうつつた。てつきりあれは蒼穹だつたらう。やがてそれも消えちまつた。

後にも先にも、あんな變てこな目に逢つたことはなかつたな。どうやら俺は腹這ひになつてゐらしく、眼を遮るものといつたら、ただこれんぼつちの地面なんだ。小草が四五本、その一本を傳はつて逆落しに這ひおりの蟻が一匹、去年の草の名残りなんだらう、芥の切れつ端が二つ三つ——まあそれだけが俺の全世界さ。そいつを俺は、片眼だけで見てゐるんだ。もう一方の眼はとい

ふと、何やら堅いものにぎゆつと壓しつけられてゐる。そいつは多分、俺の頭がのしかかつてゐる木の枝だつたらう。酷くぎごちない姿勢だから、動かうとするけれど、それが出来ない。なぜ出来ないんだか皆目わからん。そのままで時が経つ。蟋蟀がころころ鳴いてゐる、蜜蜂がぶんぶん唸つてゐる。そのほかには何の物音もない。そのうちに、自分のからだの下敷になつた右腕を、やつとこさで引き抜くと、兩手を地面へ突つ張つて、膝頭で起きあがらうとした。

何やら稲妻みたいなものが、あつと思ふ間もなく膝から胸へ、胸から頭へ、きりきりつと全身を貫きとほして、俺はまたぶつ倒れた。またしても眞の闇、またしても空を寂々さ。

俺はふつと眼がさめた。これはどうしたことだ、あのブルガリヤの青黒い夜空にざらざらしてゐる星影が、俺にはちやんと見えるんだ。するとここは天幕の中ぢやなかつたのかな？ 何だつて俺は、這ひ出しなんぞしたんだらう？ 俺は身動きを試してみる。すると兩脚が、挽がれるやうに痛いんだ。

さうか、俺は戦闘で負傷したんだな。重傷か、それとも輕傷かなと、脚の痛むところを觸つて見た。右脚も左脚も、こはこはに乾いた血糊でべつとりた。手を觸れると、痛みは一さうひどく

なる。齧齒が痛むみたいな工合で、絶え間なしにづきんづきんと心にこたへる。耳鳴りがする、頭が重い。兩脚とも傷られたことは、まあ臆ろげながら分かつたが、一體これはどうした譯だ？なぜ俺を收容しては呉れなかつたんだ？さては味方は土耳其の兵に敗れたのかな？そこでわが身に起こつたことを、俺は思ひ出しにかかつた。はじめは何だかもやもやしてゐたが、やがて判然として来たところに依ると、どうして敗北なつてことがありよう筈はないと結論が出る。だつて俺が倒れたのは（尤もこの倒れたことは憶えがない。ただ皆んながわつと前進したこと、だのに俺だけは駄げだせず、眼先にはただ何やら、青いものが消えずに残つた、とまでは憶えてゐるんだが）——とにかく俺が倒れたのは、小丘を登つた草地だつたんだ。この草地を刀で指し指し、あの小兵の大隊長が、『おい皆んな、あすこを占るんだ！』と、例のよく徹る聲で叱咤してゐたつ。そして俺たちはそこを占領したんだから、味方の敗北なつてありつこがない……。それをなぜ俺は收容されなかつたんだ？何しろこの草原と來たら、からりと開けた場所なんだから、何一つ見えないものはない筈だ。それに此處でかうして轉がつてるのは、何も俺一人ぢやあるまいし。敵の射撃はあの通り猛烈だつたんだからな。ひとつ頭をねぢ向けて、あたりの様子を見てやらう。今の寢方はそれをやるには都合がいい。最前ふつと氣がついて、例の小草や、それを傳つて逆落しに這ひおりの蟻を見たとき、俺は起き上がらうとして倒れた拍子に、もとい姿勢ぢや

なしに仰向けに轉がつたんだからな。だからこそ、あの星影も見えろといふ譯だ。

俺は腰をもたげて坐らうとする。ところが何せ兩脚の傷だ、容易なことぢやなかつた。二三度もう駄目だとかつかりもしたが、やがての果てに、痛さに覺えず知らず涙を一ぱい溜めながら、どうやら坐ることが出來た。

頭上を仰げば、青黒い空の一角だ。そこに大きな星が一つと、小さな星が三つ四つぎらぎらして、まはりは何やら黒々とした、見上げるやうな物影だ。つまり灌木林なんだ。俺は藪のなかにゐたんだ、そこで置き去りか！

俺は髪の毛の根が、ぞおつとよだつ思ひがした。

それにしても、現に俺はあの丘の草原で敵彈を受けた筈なのに、何だつて藪の中なんぞにゐるんだらう？てつきり撃たれた拍子に、傷の痛さに無我夢中で、ここへ這ひずり込んだものと見える。ただ合點の行かぬのは、今ぢや身動きもできぬこの俺が、その時どうしてこの藪まで辿りつけたかといふ點だ。ひよつとすると、その時の手傷は一箇所だつたが、ここへ這ひずり込んでからも一發、とどめの彈丸を喰らつたのかな。

色あせた薄赤い斑點が、俺のまはりに這ひ寄つて來た。大きな星の光はうすれて、幾つか出てゐた小さな星も、いつの間にか消えちまつた。月の出た。これが家だつたら、さぞよからうに

なあ！……

何やら妙な音がして来る。……誰やら人が呻いてゐるやうだ。さうだ、たしかにあれは呻き聲だ。誰か兩脚をやられた奴か、それともどてつ腹へ彈丸を喰つた奴が、御同様に置き去りにされて、どつかそこらに寝てるんぢやあるまいか。いや違ふ、呻き聲はすぐ耳の傍でしてゐるんだが、見渡すところあたりに人影はないらしい。……いやはやこりやあ、何のこつたい——この俺なんだ！ かすかな、哀れつぽい呻き聲だつた。本當にそんなにも俺は痛いのかなあ？ いや痛みもしようさ。ただ頭ん中が朦朧として、まるで鉛みたいに重いもんだから、その痛さが分からんだけの話だ。またゴロリとして、一睡りした方が氣が利いてるぞ。眠るんだ、眠るんだ……だが、そのまま醒めず仕舞ひになるんぢやないかな？ なあに構はん。

横にならうとすると、蒼白い月の光が太い帯をなして、さつと俺の臥所を照らす。すると何やら大きな物かげが黒々と、五六歩むかふに寝てゐるのが見えた。其奴のところどころが、月光を浴びてぎらついてゐる。ボタンか武器の類ひだらう。して見れば屍體か負傷兵かに違ひない。

どつちだつていい、俺は寝るんだ……。

いやいや、そんな筈があるもんか。味方は遠くへ行つちやゐない。ここにゐるんだ。土耳其の奴等を追つ拂つて、この位置にとどまつた筈なんだ。それが話聲ひとつ聞こえず、焚火のはじけ

る音もしないのは、一體どうした譯だらう？ つまりその、俺が衰弱し切つてゐるので、耳が利かなくなつたんだ。味方はきつと此處にゐるんだ。

「助けてくれ！……助けてくれえ！」

人間離れのした、狂ほしい、暖れた悲鳴が、胸の底から迸り出たが、答へはない。自分の聲が破鐘のやうに、夜氣をふるはして擴がつて行く。ほかには何の物音もない。ただ蟋蟀が相も變らず、しきりにころころ鳴くだけだ。月はまん圓な顔をして、悲しさうに俺を見てゐる。

もしその其奴が負傷兵なら、これほどの大聲だ、氣がつかんといふ法はない。して見ると屍體だ。味方かな、土耳其つぽかな？ ああ、やれやれ！ どつちだつて同じぢやないか？……と思ふうちに睡魔が、俺の腫れぼつたい眼にのしかかつて來た。

俺はもう最前から目が覺めてはゐるんだが、眼を睨つたままじつと寝てゐる。つぶつた臉ごしに日の光が感じられるので、俺は眼をあげたくないんだ。眼をあいたら最後、そいつが沁みるに違ひないからな。それにまた、下手にもぞもぞせん方がいい……。昨日（たしかあれは昨日だつたな？）俺は傷られたんだ。あれからかれこれ一晝夜だが、もう一晝夜もすれば俺は死ぬ。どう

せ死ぬものなら、じたばたしない方がいい。身體なりとじつとして置いてやらう。ついでに脳味噌の働きまで止められるんなら、願つたり叶つたりだが！　だが此奴ばかりはどうにもならん。いろんな想念、いろんな追憶、そいつが頭の中にひしめき合つてゐる。だがそれも長いことぢやあるまい、ぢきに終りだ。ただ新聞に數行をとどめるだけの話だ。我軍の損害輕微、負傷何名、戦死志願兵イヴァーノフ、とな。いや名前も出まい。戦死一名と出るのが落ちだらう。兵一名か、あの野良犬と同じだな。

一幅の情景がまざまざと俺の想ひに焼きついて來た。それはよつほど前のことだ。尤もさういへば過去の一切、俺の全生涯、つまり兩脚ぶち抜かれて此處にかうして寝るまでの生活は、一切合切とほい昔の夢に思へるんだが……。或る日街を歩いてゐると、人だかりで足を止められた。みんなが佇んで、黙然と眺めてゐたのは、何かかう血まみれの白つぼいもので、そいつが哀れげな啼き聲を立ててゐる。見れば豆みたいな可愛らしい小犬だ。鐵道馬車に轢かれて、今の俺みたいに死にかけてるんだ。するとそこへ、何處かの門番が割つてはいつて、小犬の頸根つこを撮みあげると、そのまま向ふへ持つてつちまつた。そこで人垣も散つたつけ。

この俺を撮みあげて呉れる人があるかしら？　いやいや、此處でこのまま死ぬ運命なんだ。それにしては人生はいいものだなあ！……あの日は（つまり小犬が遭難した日だが）、俺にとつちや

幸福な日だつた。俺は何やら浮かれ心地で、ふらりふらりと歩いてゐたが、それにはちやんと譯があつた。思ひ出せば切ないばかりだ、ええ思ふまい！　むかしの幸福、いまの苦艱……現在の苦しみだけで澤山だ。覺えず知らず今の身に引きくらべて、ひとしほ切なさが増すばかりの、昔の思ひ出なんぞに用はない。ああ辛い、やるせない！　こいつは傷よかよつほど毒だ。

ところで暑くなつて來た。日がかんかんに照りつける。俺は眼をあける。見えるのは、おんなじ敷におなじ空、ただそれを晝の光で見ただけの違ひだ。ほう、隣りの先生もあるな。いやこりやあ土耳其兵だ、死んでゐる。何てでつかい奴だらうなあ！　そこで氣がついてみると、やつぱり彼奴だつた……。

俺の手にかかつた男が、眼の前に轉がつてるんだ。一たい何の恨みがあつて、俺はこの男を殺したんだらう？

奴は血まみれの屍體になつて此處に寝てゐる。何だつて奴は運命の手に、此處へなんぞ追つ立てられて來たんだらう？　一體どこの何者だらう？　恐らく奴にも、俺と同じに年寄りの母親があるんだらう。その母親が、夕暮れ時になるごとに、いぶせい泥小屋の戸口へ出ては、遠い北の空を眺めながら、いつまでもじつと坐つてゐるだらう——いとしい息子はまだ歸らぬか、一家の支へ、老い先の頼みはまだ歸らぬか？……

ところで俺は？ 俺だつて同じことだ。……ああいつそ、この男と代れるものなら代りたい。何て果報な奴だらう、耳も聞こえず、傷の痛みも感じるぢやなし、死なんばかりの心の悶えも、咽喉の渴きも知らずにゐるのだ。……銃剣がぐさりと心臓へとほつたんだな。……見ろ、軍服に大きな穴が黒々とあいてゐる、その周りは血だらけだ。それをやつたのは——この俺だ。

別にさうするつもりはなかつた。戦地へ向ふ時だつて、誰に恨みがあるでもなかつた。俺も人殺しをするんだなんてことは、どうしたわけか綺麗に忘れてゐた。どんな工合にこの胸板を矢玉に曝して呉れようかと、ただそればかりを心に描いた。そして慙々さらしに出たんだ。

それがまあ何てこつた？ ええ、吾ながら愛想がつきる！ ところでこの不運な埃及の百姓になると（奴は埃及軍の服だつた）——まだまだぐつと罪は軽い。樽詰め餅みたいに船に積まれて、コンスタンチノープルへ運ばれるまでは、ロシアのこともブルガリヤのことも、噂に聞いたことさへないんだ。行けと言はれたから来たまでだ。厭だなんて言はうもんなら、咎を喰らふは固よりのこと、まかり間違へば何とか總督にピストルの弾丸をぶち込まれたかも知れんだ。奴はそこでスタンブルからルシチュークまで、遙々辛い行軍をした擧句、我軍の攻撃に逢つて、防戦したといふわけだ。ところがこつちが荒武者で、奴のかかへてゐる英國製の特許つきピボディ・マルチニ式の旋條銃なんぞは物ともせず、ぐんぐん前へ出て行くもんだから、奴さん怯えあが

つてしまつたんだ。そこで逃げださうとした途端に、これが平生ならあの眞黒な拳固の一撃でひとたまりもなく往生しさうな何處かの小男が、ひよいと跳び出して来て、ぐさりと心臓めがけて銃剣を突つ立てた。

これで奴に何の罪がある？

またこの俺にしたつて、なるほど殺しはしたけれど、一たい何の罪があるんだ？ ええ、何の罪咎があるんだ？ それを何の報いでかうも咽喉が渴くんだ？ 咽喉が渴く！ この言葉の意味を、知つてゐる人があるなら手を擧げろ！ ルーマニヤを通るときは、あの四十度といふ怖ろしい炎天を、日に五十露里の強行軍をやつたつて、その時だつてこれほどの渴きは知らなかつた。ああ、誰か来て呉れないかなあ！

ああ、さうだ！ 彼奴のあのでつかい水筒の中には、きつと水があるだらう！ だがあすこまで行かないやならんな。さぞ痛むこつたらうな！ なあに構はん、やつつけろ。

俺は這ひだす。脚をずるずる引きずりながら、力の抜けた両手で、梃子でも動かぬ胴體をやつとこさで押して行く。屍體まではほんの二間あまりだが、それが俺にとつちや何十露里にもまし

* スタンブルルコンスタンチノープルの土耳古名。

** ルシチュークブルガリヤの都市、ローム河とドナウ河の交流點にある。

て遠い——いや遠いぢやない、辛いんだ。だがとにかく這つて行かにならん。咽喉が焼けつく、まるで火みたいにかつかと燃える。それに水なんかない方が、手つ取り早く死ねるんだが、そこがそれ、若しやといふことが……。

で俺は這つて行く。脚が地面にひつかかつて、ひと動きするごとに涙が出るほど痛い。俺は大聲を立てる、情ない聲だ、だがやつぱり這つて行く。やつと辿りつく。そら水筒だ……たしかに水はある——それもどつさりある！ 半分以上もあるらしい。有難い！ まづ當分は水に困らん……やがて死ぬその時までには！

現在手にかけてこの俺を、お前は助けて呉れるのだ！……俺は片腕ついて水筒の紐をときにかかつたが、ふと中心を失つて、命の恩人の胸の上へ、がくりと顔をついてしまった。相手はもうひどい屍臭を發してゐた。

俺はたらふく飲んだ。生温い水ぢやあつたが腐つてはあらず、それに澤山あつたから。これでもだ二三日は生き延びられる。さうさう、あの『日常生理』といふ本に、水さへあれば人間は、食物がなくなるとも一週間以上は生きてゐられるものだと、さう書いてあつたつけない。さう言へばあの

本には、絶食自殺を遂げた男の話も出てゐたつけない。そいつはなかなか死ねなかつた、水を飲んでたからだ。

で、それがどうした？ よしんばあと五六日生き延びたところで、それが一たい何になる？

味方はゐないし、住民どもは逃げちまつた。この近邊には往來もない。どつちみち死ぬんぢやないか。三日で済むこの苦しみを、わざわざ一週間に引き延ばしただけの話だ。いつそ一思ひにやつた方がよくはあるまいか？ 隣の先生の傍には銃もある、しかも素晴らしい英國製だ。ただ片手を伸ばしさへすりや、あとは——ほんの一瞬きで片がつく。彈藥も一山そこに轉がつてゐる。射ちきる暇がなかつたんだ。

やつつけるか——それとも待つか？ 待つつて何をだ？ 救助をか、死をか？ 土耳其の奴等がやつて来て、この深傷を負つた脚の皮を、剥がしにかかるまで待つといふのか？ それくらいなら自分でやつた方がましだ。

いやいや、さう力を落としたものでもないぞ。最後まで、力の盡きるまで、鬪つて見ようぢやないか。何しろ見附けて呉れさへすれば、俺は助かるのだ。骨は無事だつたかも知れんのだ。元のからだにはなれるだらう。故郷へ歸つて、母にも逢へる、あのマーシャにも……。

ああどうかして、あの二人が本當のことを知らずに濟めばよい！ 俺が即死を遂げたものと思

はして置きたい。俺が二日、三日、そして四日も苦しみ抜いたと知つたなら、あの二人の胸の中はどんなだらう！

眩暈がする。お隣りまでの大旅行で、精も根も盡きちまつた。おまけにこのひどい臭氣だ。此奴えらく土色になつて來やがつたなあ……これが明日明後日と重なつたら、一體どんなになるんだらう？ 何しろかう力が抜けちまつては退くにも退けんから、ここにかうして寝てゐるんだ。ひと休みしたら、また元の場所へ這ひ戻らう。幸ひ向ふは風上だから、この厭な臭ひを拂つて呉れるだらう。

俺はぐつたりと横たはつてゐる。日がじりじりと顔や手に炒りつける。引つ被りたいにも何も無い。せめて早く夜になつて呉れればいい。それで二た晩目になる勘定かな。

思ひが次第にもつれて來て、俺はうつらうつらと睡りに落ちる。

四 日 間

だいぶ長く眠つたと見え、目が覺めたときはもう夜中だつた。別に變つたことも無い。傷はつきつきするし、隣りの先生は相變らず小牛みたいで、じつと動かず寝てゐるのだ。

どうもこの男のことが氣になるなあ。一たい俺が、愛しいもの大事なものを皆んな振り棄てて、

遙々こんなところまで千露里もの遠征をやつて、飢ゑ、凍え、炎熱に悩んだのは、そしてとどのつまりは今ここにかうして、悶え苦しみながら寝てゐるのは——ただ一つ、この不運な男の息の根をとめんが爲めに過ぎなかつたのか？ 一たい俺はこの殺人のほかに、何か戦さの利益になることを爲でかしたか知ら？

殺人、人ごろし……。それは誰のことだ？ この俺なんだ！

俺が従軍を思ひ立つたとき、お袋もマーシャも諫め立てはしなかつた。尤も俺の身を思つて泣いちや呉れたが、理想に目の眩んだこの俺は、そんな涙を見向きもしなかつた。あとで親身な者達にどんな憂目を見せることになるのやら、てんで分かつちやゐなかつたんだ（今こそ思ひ知つたんだが）。

ええ、今さら思ひ出して何になる？ 過ぎたことは返りはせん。

だがあのとき俺の決心を聞いて、友達仲間の見せた態度は、實に奇怪至極だつたなあ！ 『ふん、馬鹿な奴め！ 何が何やら分かりもせんで出しやばりやがる！』だとき。そんなことが言へた義理かい？ やれ英雄的精神だ、やれ祖國愛だと、何のかんと言ふ口の下から、よくもそんな文句が吐けたな？ あ、連中の眼から見たつて、俺は即ちさうした勇猛心の發揮者ではないか。なのにその俺のことを、『馬鹿な奴め』と抜かすんだ。

四 日 間

で俺はまづキシニョフ^{*}へ行つた。そこで背囊はじめ色んな装備を背負はされた。それから何千といふ戦友と連れ立つて出掛けたんだが、その中には俺みたいに志願して出た奴が、さあ四五人もゐたらうか。他はみんなお許しさへ出りや家に轉がつてゐたい奴等だつた。がとにかく奴等も、俺たち『自覚ある』連中と行を俱にして、何千露里の道もいとはず、いざ戦ひとなれば俺たち同様に奮戦するんだ、いや寧ろ俺たち以上かも知れん。許しさへ出りや早速なにもかも打乗^{うちま}つて、歸つて行きさうな手合ひだが、本分だけはよく盡くすんだ。

身にしむやうな朝風がさつと吹き渡つた。藪がざはめいて、寝ぼけた小鳥が一羽ばたばたと飛び立つた。星影も消えた。暗藍色の空は白みかけて、柔らかい羽毛のやうなちぎれ雲が一面に浮いて出た。灰色の薄闇がみるみる地上を離れてゆく。いよいよ三日目の幕あきか、俺の……さて何と言つたものかな、餘生でもなし、まあ斷末魔のさ。

三日目と……餘すところあと幾日かな？ いづれにせよ残り僅かだ。俺はひどく衰弱しちまつて、どうやら屍體の傍を離れる力もなささうだ。間もなく俺も此奴と同じ屍體になつて、お互ひに敵も味方もなくなるだらう。

水はうんと飲まなきやならん。日に三度、朝、午、^{ひる}晩と飲むことにしよう。

日が昇つた。その巨大な盤面は、灌木林の黒い枝で縦横無盡に切り裂かれて、血のやうに眞紅だ。今日も暑さうだな。おい隣りの先生、お前はどんな姿になることかしらん？ 今でさへ淺ましい姿なのになあ。

まつたく二目と見られぬ姿だつた。髪はそろそろ脱け落ちだして、もともとどす黒い膚の色は、蒼ざめかけて、黄味をさへ帯びてゐた。顔の浮腫^{せきみ}に皮が引つ攣れて、耳の後ろが裂けてゐた。そこには蛆^{うす}がわいてゐた。脚絆^{かき}ばきの兩の脚にも浮腫が來てゐて、脚絆の留釦^{ホック}のあひだから、ぶよぶよの大きな水腫^{みづが}れがはみ出してゐた。全身もふくれあがつて小山のやうだ。このうへ今日の日照りに曝^{さら}されたら、一體どんな態^{さま}になるんだ？

かうびつたりと寄り添つてゐたんぢや遣り切れない。何はともあれ這ひ戻ることだ。だが出来るかしらん？ まだ手も利くし、水筒の栓を抜いて、ぐびりぐびりと飲むことも出来るが、さてこの動きのとれぬ重たい胴體を、持ち運ぶとなるとどうだかなあ？ ともあれ動いて見よう。ほんの僅かづつでもいい、よしんば一時間に半歩でも。

この引越して午前中は丸つぶれだ。痛みはひどいが、この場に臨んでそれが何だ？ 俺はもう健康人の感覚なんか覚えてもゐず、それがどんなものやら見當さへつかなくなつてゐる。どうやら脚の痛みにも慣れつこにさへなつてゐる。朝のうちに何と二間あまりを這ひ戻つて、また元の場所にほつと息をついた。ところが新鮮な空気を——尤も腐れかかつた屍體から六歩のところまで、新鮮なもないもんだがね——とにかくそいつを楽しめたのも束の間で、風が變つて、またしても厭な臭ひが吹きつける始末だ。いやその猛烈なこと、思はず胸がむかついたね。空つぽの胃袋がきりきりつと引つ攣るやうに収縮する。臟腑といふ臟腑がのたうち廻る。だのにむつと鼻をつく蒸れた空気が、遠慮會釋もなく漂つて來るんだ。

心の底から情なくなつて、俺は泣きだす。

全くもうへとへとで、心機は朦朧と、殆んど失神状態でぶつ倒れてゐた。と遽かに……。もしや氣の迷ひから來る空耳では？ いや、どうもさうとは思へない。おお確かにあれば——人聲だ。蹄の音だ、人聲だ。すんでのことで大聲立てようとして、辛くも思ひとどまつた。萬一あれが土耳其の奴等だつたらどうする？ その時はどうなる？ 今の苦しみにかてて加へて、これど

ころか、新聞で讀んでさへ身の毛のよだつ、淺ましい憂目を見なければならぬ。生き皮を剝かれ、深傷の脚を火炙りにされるんだ……。それだけで濟めばまだしもだが、全く奴等と來たら何を考へ出すやら分かつたもんぢやない。ここでこのまま死ぬよりも、奴等の手にかかつて往生する方が増しだとも言ふのかい？ だがひよつとして味方だつたら？ ええ、冀々しい藪だなあ！ 何だつてさうぎつしりと垣根みたい、ぐるり一面に生えやがつたんだ？ 透かして見たくもこれぢや何一つ見えやせん。ただ一箇所まるで小窓みたい、枝の隙間から遙かの窪地が見渡せるところがある。あすこにはたしか小川があつて、戦闘の前に俺達が水を飲んだつけな。さう言やなるほど、あの小川に橋の代りに架してあつた、砂岩のでつかい板石も見えるぞ。奴等はきつとあれを渡るに違ひない。そのうちに人聲は遠のく。一たい何語で喋つてゐるのか、つひに聞き分けられなかつた。耳まで遠くなつてたんだ。南無三！ もしも味方であつて呉れたら……。俺は聲張りあげて嘔鳴つてやらう。あの小川の邊からだつて、聞こえぬといふ筈はあるまい。下手まごつて土耳其の民兵ばらの手に落ちるより、その方が上策だ。どうしたんだらう、なかなか通りかからんなあ。待ち遠しさに氣が氣でない。屍體の臭氣は薄らぐ段ぢやないのだが、それさへきれいに忘れてゐた。

と不意に小川の渡しに姿を見せたのはコサック騎兵だ！ 青い軍服、ズボンの赤側條、槍の林

——堂々五十騎ほどの一隊だ。先頭には黒鬚の將校が、駿馬を打たせて進んで行く。つづく五十騎が渡河を終へると見るが早い、將校は鞍上あざやかに、全身ぐるりと後ろへ振り向けて、

「速歩はやむちにい、進めえ！」と號令をかけた。

「待て、待つて呉れえ、後生だあ！ 助けて呉れ、助けて呉れよお、おおい皆んな！」

俺は喚き立てるが、張り切つた馬の蹄の音、サーベルの響き、ユサク特有の例のがやがや話に、俺の噺れた叫びの勝てよう筈もなく——奴等の耳にははいらんのだ！

ええい駄目か！ 心の張りが一時にゆるんで、俺はがくりと地面へ突つ伏すと、おいおい聲をあげて泣き出した。その拍子にひつくり返した水筒から、水が流れた。いや水ぢやない、俺の生命いのちが、助かる望みが、末期を延ばして呉れる靈泉が、どくどくどくとこぼれるんだ。ところがはつと氣づいた時には、もうコップにせいぜい半分ほどを餘すばかり、あとはからからに乾あがつて、咽喉を鳴らして待つてゐた大地へ、吸ひ込まれてしまつてゐた。

この哀れ無残な目に逢つてからの俺の茫然自失ぼんざしの態を、今さら思ひ返すことが出来ようか？ 俺は薄眼をあげたまま、死んだやうに横たはつてゐた。風向はひつきりなしに變つて、新鮮な清らかな空氣を送つて來るかと思へば、また例の惡臭を吹きつける。この日のうちの隣の先生の妻まじい變りやうと來たら、筆にも舌にも盡くされない。一度その様子を見ようと眼をあげてみ

たが、思はずぞつとしちまつた。もう顔の影も形もありはしない。骨を離れて流れちまつたんだ。その露出むきだしの頸骨がにたりと浮かべてゐる笑ひ、もはや消える時のない笑ひが、俺には反吐へどが出るほど厭いやだつた、淺ましかつた。髑髏むくろをいぢくつたこともあるし、生けるが儘の人頭にメスを入れて試アバラ片を作つた覺えもある俺だが、あんな思ひをしたことは曾てなかつた。その骸骨が軍服をきて、ボタンを光らせてゐるのを見ると、俺はがたがた慄へちまつた。「これが戦争だ」と俺は思つた、「これがその姿だ。」

日は相變らずじりじりと炒りつける。手といはず顔といはず、もう最前さいぜんからひりひりしてゐる。水の残りもすつかり飲んぢまつた。渴きがあんまり酷いので、ほんの一口飲むつもりのところを、思はずがぶりと飲み乾したのだ。ああ何だつてこの俺は、あのユサクの一隊がすぐ鼻先を通つたとき、聲を立てて呼ばなかつたんだ！ よしんばそれが土耳其の奴等だつたにしろ、まだしも増しぢやなかつたか。なあに、たかだか一二時間の責苦で済んだんだ。ところがこれぢや、何時まで此處にすつ轉がつて苦しむことやら、見當さへもつかんのだ。ああお母さん、懐かしいお母さん！ これがお耳にはいつたら、さぞや白髪おさげの垂髪おさげをかき巻つて、頭を壁へ打ちつけて、私を産みなすつた不吉な日をば呪はれるでせう、いやいや人の子を苦しめに戦争なんぞを思ひついたこの世界を、さぞや呪はれることせう！

だが、あんなにしろマーシャにしろ、私がこんなに苦しんだことなど、噂にも聞くはずはないんだ。さやうなら、お母さん、さやうなら、わが許嫁、戀しいマーシャ！ ああ辛い、情ない！すると胸もとに何やらがこみ上げて……。

ええ、またあの白い小犬めが！ 門番は不便がるところか、腦天を壁へ叩きつけて、そのまま汚水の流れこむ塵芥溜めへ、抛り込んでしまつたつけ。だが小犬はまだ息があつて、それからまる一日苦しんだんだ。ところがこの俺はもつと惨めだ、何しろこれで三日も苦しみ抜いてるんだからな。明日は——四日目だ、それから五日目、六日目……。死神め、貴様は何處にゐる？ 来い、早く来てくれ！ 早く俺を引つ攫つて呉れ！

だが死神は、來ても呉れず攫つても呉れない。そして俺は、この凄まじい日照りの下にすつ轉がつたなり、焼けつく咽喉をうるほさうにも一滴の水もありはせず、そろそろ屍體の臭ひが傳染つて來さうだ。奴はすつかり壞れてしまつた。その殘骸から、何萬と知れぬ蛆蟲が、ぼろりぼろりと轉がり落ちる。ああ何てうじやうじやしてやがるんだ！ 彼奴が食ひ盡くされて、骨と軍服つきりになつたら、今度は——俺の番なんだな。俺もあんなになるんだな。

日が暮れる、一夜が明ける。變りはない。日が高くなる。やはり同じだ。やがてその日も過ぎて行く。……

藪が揺らいで、ざわざわと鳴る。まるで小聲で話をしてゐるやうだ。

『そら死ぬぞ、そら死ぬぞ、死ぬんだぞ！』と一方の枝葉がささやく。『逢へずになあ、逢へずになあ、逢へずになあ！』と、向ひの藪がそれに應へる。

「逢へずに行くとこだつたぞ、こんな處とこにゐたんぢやなあ！」と、大きな聲がその邊でした。俺はぶるぶるつとして、はつと吾に返ると、藪かげから、ヤーコヴレフの優しい碧眼がじつと俺を見てゐる。隊の上等兵だ。

「おい、シヤベルだ」と彼は叫ぶ、「ここにもう二つあるぞ、一つは敵のだ。」

『シヤベルは要らんよ、俺を埋めんでくれ、生きてるんだ！』と叫ばうとするが、力ない呻きが乾き切つた唇を漏れるばかりだ。

「やあ！ こりやあ生きとるらしいぞ？ イヴァーノフの旦那ぢやないか！ おおい皆んな、早く來い、旦那が生きとるぞお！ 軍醫殿を呼ぶんだ！」

一分もたたぬうちに、口の中へは水、ヴォトカ、それからまだ何やらが注ぎ込まれる。と思ふうちに何の覺えもなくなつた。

* 旦那イヴァーノフは一兵卒ながら貴族の出であるからさう呼んだのである。

調子よく揺れながら、擔架は進んでゆく。その調子のいい揺れ工合が、俺をあやして寝かしつける。目が覚めるかと思ふと、また昏々と眠り入る。傷は繃帯されたのもう痛まない。何やらかう口では言へない嬉しさが、總身をぞくぞくさせてゐる。……

「止まれえ！ 下ろせえ！ 看護手、第四交代、前へ！ 擔架につけ！ かかれ、擔へえ！」
號令をかけてゐるのは、隊の看護班將校のピョートル・イヴァーノヴィチだ。ひよろひよると脊の高い、頗る親切な男である。そののつぼさ加減と來たら、大の男が四人がかりで肩に擔いでゆく擔架の上から、俺が眼を返して見やつても、疎ら髯の生えた頤の邊と肩先だけしか眼には見えない。

「ピョートル・イヴァーノヴィチ！」と俺はささやく。

「何かね、君？」

ピョートル・イヴァーノヴィチは上から俺をのぞき込む。

「ピョートル・イヴァーノヴィチ、軍醫殿は何と言はれました？ もう駄目なんでせうか？」

「なあんだ、イヴァーノフ、馬鹿を言ひたまへ！ 君は大丈夫だよ。骨は一本もやられちゃるないんだ。全く運が好かつたなあ！ 骨も動脈も無事なんだよ。だがこの三晝夜半も、よくまた生きてゐられたもんだな？ 何を食つてたんだね？」

「別に何にも。」

「で水は飲んだかね？」

「土耳其兵の水筒です。ピョートル・イヴァーノヴィチ、今は口が利けません。あとでまた……。」

「さうともさうとも、ゆつくり寐たまへ、なあ君。」

また昏々と覺えがなくなる……。

氣がついてみると、師團の野戰病院だつた。ぐるりには屏風のやうに醫者の顔、看護婦の顔。

まだそのほかに、見知り越しのペテルブルグの有名な教授の顔も見え、俺の脚のうへに踏みこんでをられる。その両手は血みどろだ。教授は俺の脚のところを暫くごそごそやつてゐたが、やがて俺の顔を見て、

「まづお目出度う、君！ 命はとりとめたよ。尤も脚は一本頂戴したがね、なあにそんなもの

——何でもないさ。口は利けるかね？」

口は利ける。で俺はここに書いた一部始終を、皆んなに話して聽かせる。

口は利ける。で俺はここに書いた一部始終を、皆んなに話して聽かせる。

信

號

セミヨン・イヴァーノフは鐵道の線路番を勤めてゐた。彼の番小屋から一方の驛までは十二露里、もう一つの驛までは十露里あつた。四露里ほどの土地に去年大きな紡績工場が立つた。その高い煙突が遙かの森蔭から黒々とのぞいてゐたが、それより近くには、兩隣りの番小屋を別にする、森番の家ひとつなかつた。

セミヨン・イヴァーノフは病身の、生活に疲れ切つた男であつた。九年前に彼は戦争に出たことがある。ある將校の從卒を勤めて、遠征の辛苦をつぶさに主人と共にしたのである。飢ゑに苦しみ、寒さに凍え、炎天に燬き焦がされ、その炎天や寒空について、日に四十露里から五十露里の強行軍をしたものである。銃火の下に身をさらしたこともあつたが、幸ひとかすり傷ひとつ負はずに済んだ。ある時などは彼の聯隊が第一線に立つたこともある。そのときは、まる一週間ぶつ通しに土耳其軍と銃火を交へた。味方が戦線を敷いてゐる場所と、窪地一つを挟んで土耳其軍の戦線があり、朝から日暮れまで、時々思ひ出したやうに彈丸を送つてよこすのだ。セミヨンの附いてゐる將校もその戦線にゐた。でセミヨンは日に三度三度、谷間にある聯隊庖厨から、しゅんしゅん沸いたサモヴァルと食事を運んで来てやるのだつた。サモヴァルをさげて暴露地帯

を歩いて行くと、弾丸がひゆうひゆう鳴つて、そこの石にびしつびしつとぶつかる。セミヨンは怖くて、思はず涙が出るけれど、それでも身體は進んで行く。隊の將校連はこの彼に大満足だつた。彼のお蔭で二六時ちゆう熱い茶を缺かしたことがないからである。彼は無事に戦地から戻つては來たが、ただ手足にレウマチの痛みを覚えるやうになつた。それからこつち、彼の嘗めた苦勞はひと通りではなかつた。家に歸つてみると——年をつた親父は亡くなつてゐた。餓鬼も四つの歳で、咽喉を腫らしてやはり死んでゐた。セミヨンは女房とたつた二人きりになつた。暮らし向きもうまく行かなかつたし、第一あの浮腫せきみの來た手足で地面を耕すのはもともと無理だつた。二人は自分の村に居たたまれないことになつて、新しい土地へ好いことを捜しに出掛けた。セミヨンは女房を連れて、國境の方へも行つてみたし、ヘルソーンにも、ドン地方にもしばらく足をとめてみた。何處へ行つてもいい芽は出なかつた。たうとう女房は下女奉公に出て、セミヨンは相變らずそこを流れ廻つてゐた。或るとき汽車で旅をすることになつたが、とある驛に停車したとき、その驛長がどうやら見覚えのある人のやうな氣がした。セミヨンが驛長をじろろ見てゐると、向ふでもやはりセミヨンの顔をじつと見てゐる。やがてお互ひに思ひ當たつた。もとゐた聯隊の將校だつたのである。

「お前イヴァーノフぢやないか？」と相手はいつた。

「はつ、さうであります、且那樣。私なんであります。」
 「何だつてこんな所へやつて來たんだね？」
 セミヨンはこれこれしかじかだと、身の上をうち明けた。
 「でこれから何處へ行かうといふのかね？」
 「それが分らないのであります。」
 「なにを馬鹿な、なぜ分らないのか？」
 「はつ、さうであります、且那樣。つまり行くところが無いのであります。何か仕事をみつけないではならないのであります。」

驛長はじつと彼を見て、暫く考へてゐたが、やがてかう言つた。

「なあどうだね、當分この驛にゐることにして見ちやあ。お前たしか女房がある筈だな？ 女房はどこに置いてある？」

「はつ、さうであります、女房がありますんで。女房はクルスク市の商人の家に下女奉公に行つてをります。」

「ぢや女房に手紙を出して、こつちへ來るやうに言つてやれ。無賃乗車券を何とかしてやらう。ここの線路番の小屋が一つ明くことになつてるんだ。すぐお前のことを保線課長へ申請してやる

としよう。」

「ほんとに有難うございます、旦那様」とセミヨーンは答へた。

彼はそのまま驛に足をとめた。驛長の家の勝手仕事を助けたり、薪を割つたり、構内やプラットフォームの掃除をした。二週間すると女房もやつて来たので、セミヨーンは手押し車のトロッコに乗つて、自分の番小屋へ行つた。番小屋はまだ新らしくて、温かだ、薪ときたら望み放題あるし、野菜畑も小さいながら前の線路番の残して行つたのがあつたし、半町歩からの耕地も線路の両側にあつた。セミヨーンは嬉しくなつてしまつた。どんな工合に世帯をもつて行かうか、牝牛や馬の一匹も買はうか、などと考へはじめた。

必要な物品はのこらず支給された。青旗、赤旗、手提燈、呼子、ハンマー、止め振子を締めるスバナリ、鉄槌子、シャベル、箒、ねぢ釘、犬釘、それからまた鐵道規則ののつてゐる薄い本が二冊に、列車時間表も渡された。はじめのうちセミヨーンは夜の目も寐ずに、時間表をすつかり讀記するのだつた。列車が通るまでまだ二時間も間があるのに、自分の受持區間をひと巡りしたり、番小屋の前のベンチに腰かけて、レールが震動して來はしないか、汽車の音はまだしないかと、絶えず眼や耳を働かせてゐた。規則もすつかり讀で覚えてしまつた。讀む方は不得手で、どうにか綴りを辿り辿り讀む程度だつたが、それでもちやんと讀記してしまつた。

それは夏のことだつた。仕事は辛くはなかつたし、雪を掻く世話もいらなかつた。それにまたこの線には列車が滅多にはいつて來ないので、セミヨーンは一晝夜に二度つつ自分の受持區間を見廻つて、そここの止め振子を試つてみたり、緩んでゐると見れば締め上げたり、砂利を平らに均らしたり、水管の工合を調べたりして、それから島の面倒をみに戻つて來る。ところが島のことになる、厄介なことが一つあつたといふのは、何事にまれやらうと思ふことは一々、線路監督に願ひ出なければならなかつた。その監督から保線課長へ報告を出すといふ譯で、願ひが許可になつて戻つてくる内には、時季が過ぎてしまふのだつた。セミヨーン夫婦はだんだん退屈にさへなつて來た。

二た月ほどの時がたつた。セミヨーンは兩隣りの線路番と顔馴染みになりだした。一人はよぼよぼの爺さんで、鐵道の方では前々から更迭をもくろんでゐた。殆んど小屋から出たことはなく、細君が代りに線路の見廻りをしてゐた。もう一人の、驛に近い方の小屋にゐる線路番は、まだ若い男で、瘠せてこそゐるけれど筋骨逞ましかつた。彼とセミヨーンとが初めて顔を合はせたのは、見廻りのとき、お互ひの小屋の中ほどの線路の上でだつた。セミヨーンは帽子をとつて、お辭儀をして、

「御機嫌よろしう、お隣りさん」と言つた。

隣りの男は横目でじろりと彼を見て、

「今日は」と言つた。

そしてくるりと背中を向けると、すたすた向ふへ行つてしまつた。その後で女房同志も互ひに顔を合はせる機会があつた。セミヨーンの女房のアリーナは、隣りの細君と挨拶を交はしたが、向ふはやはり餘り口敷を利かないで、さつさへ行つてしまつた。セミヨーンもある時その細君を見掛けたので、

「ねえお新造さん、あんたの御亭主はどうしてあんなに無口なんですか？」と言つてみた。

女房はちよつと黙つてゐたが、やがてかう言つた。

「けどね、一たい何をあの人がお前さんとお喋りすることがあるの？ 誰だつてみんな自分の仕事があるんだもの……お前さんも歸つて仕事をした方がいいでしょ。」

とはいへ、それから一と月もすると、二人は懇意になつた。セミヨーンとヴァシーリイは線路のうへで落ち合ふと、土手の縁に腰をおろして、互ひにパイプをふかしながら、めいめいの身上話をするのだつた。ヴァシーリイの方はどつちかと言ふと聴き役で、セミヨーンが自分の村のことや戦地のことを、話してきかせた。

「かう見えても」と彼は言ふのだつた、「俺も随分と苦勞して來たものさ。それに老い先ももう

長くはねえんだ。つまり俺は、仕合はせを授からなかつたのさ。一たん神様がある運勢をその人にお授けなすつた以上は、もうそれつきり動かしやうもないんだ。まつたくよ、なあヴァシーリイ・ステパーヌイチ。」

するとヴァシーリイ・ステパーヌイチは、パイプを線路の端でぽんと叩いて、立ちあがつてかう言ふ。

「うんにや、お前や俺の一生を臺なしにしががるのは、運勢なんてもんぢやあねえ、人間どもなんだ。まつたくこの世の中に、人間ほど強欲で性の悪い獣はねえよ。狼は共喰ひなんかしねえが、人間と來た日にや生き身の人間をぼりぼり喰ふんだ。」

「いいや兄弟、狼は共喰ひをやるぜ、そんなことを言ふもんぢやあねえよ。」

「ひよいと口に出たんで言つたまでよ。とにかく人間くれえ惨い生き物はねえぜ。これで人間が性悪でも強欲でもなかつたら、俺らの暮らしも立たうになあ。見ねえ、どいつも此奴もお前の生き身に爪を立てようと狙つてるんだ、肉を剥ぎとつて啖ひつかうと牙をといでるんだ。」

セミヨーンは考へ込んでしまつた。

「俺にや分かんねえけどね、兄弟」と彼は言ふ、「ひよつとしたらさうかも知んねえ。だがもしさうとすりや、それにはそれでちゃんと神様の思召しがあるんだあね。」

「だがもしさうとすりゃ」と、ヴァシーリイは相手の言葉尻をとつて、「俺らがかうして話をすることも要^いねえ譯だ。胸糞の悪いこたあ残らず神様に背負はしちまつて、お手前は坐り込んでじつと辛抱してるんなら、そいぢやあもう兄弟、何も人間様なこたあ要らねえ、畜生で結構だ。俺の言ひてえのはそいだけよ。」

と言ひ棄てて、くるりと背中を向けると、あばよとも言はずに行つてしまつた。セミヨーンも立ちあがつた。

「おおい隣りの人」と大聲で、「何だつてさう悪態をつくんだい？」

隣りの男は振り向きもせず、ずんずん行つてしまつた。セミヨーンはそのまま、ヴァシーリイの姿が切通しの曲り角に見えなくなるまで、長いことじつと見送つてゐた。家へ歸つて來ると、女房にかう言つた。

「なあ、アリーナ、俺らの隣りの奴あ、ありや悪玉だぜ、人間ぢやねえ。」

とはいへ二人は仲違ひをしたのではなかつた。そのうちまた顔を合はせると、相變らず話をしだしたが、話の題目は同じことだつた。

「ええ兄弟、もし人間どもがかうも……何でなかつたら、お互えに番小屋なんぞにくすぶらねえでも濟んだんだぜ」とヴァシーリイは言つた。

「番小屋がどうだと言ふんだね……結構、暮らして行けるぢやねえか。」

「暮らして行ける、ふん暮らして行けるか……。駄目だなあ、お前は！ 色んな世渡りをして來たくせに、さつぱり世間といふものが分かつちやねえ。色んなことを見て來たくせに、さつぱり正體が見えちやねえ。貧乏人といふものは、こちらの番小屋にゐようがゐまいが、どつちみち人間らしい暮らしは出來ねえんだ！ そこいらの人食ひ鬼どもに、お前は食はれてるんだぜ。生血のありつたけを搾つちまつて、お前が老いぼれになつてくると——まるで油粕か何かみたい
に、ぼいと豚の餌に呉れちまふんだ。お前、給料はいくら貰つてるね？」

「うん、大したこともないさ、ヴァシーリイ・ステパーノヴィチ。十二ルーブルだよ。」

「俺あ十三ルーブルと半分だ。そこでお伺ひ申すが、こりや一體どうした譯だね？ お上の規則ぢや誰彼間はず一律に、月十五ルーブルの手當に、薪や油がつくことになつてるんだ。一たい誰が、お前が十二ルーブルで俺が十三ルーブル半だと、そんな決め方をしやがつたんだ？ ええ、伺ひてえもんだね？……だのにお前は、暮らして行けると仰しやるんだ！ 斷つて置くけど、高がルーブル半だの三ルーブルだののこを、彼はいふんぢやないんだぜ。十五ルーブルまるまる呉れたにしたつて同じことなんだ。俺は先月、停車場に行つたつけがね、そこへ局長が汽車で通りかかつたのを、俺はこの眼で見つたんだ。まあ拜んだといふ譯かな。奴さん別仕立ての客車に

納まつてたが、やをらプラットフォームに降り立つて、そつくり返つてゐやがつた。……まあさ、俺が此處にあるのも長いことぢやねえぜ。出て行くんだ、足の向く方へな。」

「出て行くつて何處へ行くんだね、ステパーヌィチ？ あんまり上を見ると碌なことあないぜ。ここにありやお前、家もあるし、濫かだしさ、小さいながら畠地もあるんだ。それにおかみさん、働き者だしさ……。」

「畠地だと！ まあ俺んこの畠を見てから言つて呉れ。枯れ枝一本立つちやゐねえんだ。

この春キャベツを植ゑたんだがね、するてえと忽ち監督の奴が飛んで来て、『こりや何ちふことだ？』とかうなんだ、『なぜ願ひ出んのか？ なぜ許可を受けんか？ 根こそぎそつくり掘り返しちまへ。』 奴さん酔拂つてたんだ。これが素面しよふのときだつたら、見て見ぬ振りで済ましたに違ひねえのに、その時は妙に依怙地になりやがつてね……『三ルーブルの罰金だ！……』と來た。」

ヴァシーリイは口を噤むと、パイプを二た吸ひ三吸ひしたが、やがて小聲で、

「すんでのことで、あいつ死ぬほど打ちのめして呉れるとこだつたよ。」

「なあ、隣りの人、何ほ何でもお前さんは氣が早すぎるよ。」

「氣が早いんでも何でもねえさ、ただ筋の通つたことを言つたり考へたりするまでよ。まあその中にきつと返報はして見せるぞ、茹で章魚め。保線課長へ直訴してやるんだ。今に見ろよ！」

そして實際、彼は直訴をしたのである。

あるとき保線課長が線路の檢分にやつて來た。もう三日すると、ペテルブルグのお偉い方々がその線を通過する筈だつた。それが檢閲といふ觸れ込みなので、その一行の通過に先だつて、萬事ちゃんと整頓しておく必要があつたのだ。砂利パラスを敷き足し、きれいに均らし、枕木を一々検査し、大釘を打ち直し、止め振子を締めなほし、枕は塗りかへ、踏切には黄色い砂を撒き足すやうにとのお達しが出た。隣りのおかみさんまでが、例の爺さんを草取りに追つ立てる騒ぎだつた。セミョーンはまる一週間せつせと働いた。線路の方がすつかり片附くと、自分の長上衣カフタの綻びも繕ひ、きれいにブラシをかけて、眞鍮の徽章は煉瓦でもつて、びかびかになるまで磨き上げた。ヴァシーリイも働いた。課長がトロッコでやつて來た。工夫が四人がかりでハンドルを廻して、齒車がぶんぶん唸つてゐた。そのトロッコで一時間に二十露里もぶつ飛ばすので、ただもう車輪がごうごう鳴つてゐた。セミョーンの小屋の前へすつ飛んで來た。セミョーンはそこへ跳んで出て、軍隊式に報告をした。

萬事遺漏のないことが分かつた。

「お前は以前からここにゐるのか？」と保線課長はきいた。

「五月の二日からあります、閣下。」

「よろしい。御苦勞ぢやつた。して百六十四番の小屋は誰かな？」

線路監督は同じトロッコで隨行してゐたが、それに答へて、

「ヴァシーリイ・スピリドノフでございます。」

「スピリドノフと、スピリドノフと……。ははあ、去年君が注意人物ぢやと言つてをつた、あの男だな？」

「左様でございます。」

「ふむ、よしよし。そのヴァシーリイ・スピリドノフの方を見よう。出せ。」

工夫たちはハンドルにしがみついた。トロッコは先へ進んで行つた。

セミョーンはその後ろを見送りながら、かう考へた、『こいつああの連中、隣りの奴とひと悶着おこすぞ。』

それから二時間ほどすると、彼は見廻りに出て行つた。すると向ふの切通しのところから、線路つたひにやつて来る人影が見えた。頭の邊に何やら白いものがちらちらしてゐる。セミョーンが眼を凝らしてみると、それはヴァシーリイだつた。杖を片手に、小さな包みを肩にかけて、片頬には布ぎれを巻きつけてゐる。

「隣りの人、どこへ行かうつてんだね？」とセミョーンは呼びかけた。

ヴァシーリイはすぐ鼻先へやつて來た。まるで顔色はなく、白墨のやうに白かつた。眼は獸のやうにぎらついてゐた。口を利きだすと——聲はとぎれ勝ちだつた。

「都へ行くんだ」と彼は言つた。「モスクヴァへ行くんだ……本省へな。」

「本省へ……。うん讀めた！ ぢやあ訴へに行くんだね？ よしなよ、ヴァシーリイ・ステパノイチ、忘れちまへよ……。」

「うんにや、兄弟、忘れる譯にや行かねえ。忘れるにやちと手後れなんだ。見ねえ、あいつ俺の面を張りやがつたんだ、かうして血まで出しやがつたんだ。生きてる限りは、忘れる譯にや行かねえ、このまま濟ます譯にや行かねえんだ！」

さういふ彼の手をセミョーンは取つた。

「やめにしろよ、ステパノイチ。俺あ悪いこたあ言はねえ、そつとしとくが身の爲めだぜ。」
「何が身の爲めだ！ そつとしとくが身の爲めだぐれえ、俺だつて百も承知だあ。お前は運勢のことを言つてたつけが、今になつてみりや成る程と思ひ當たらあ。みすみす身の爲めにやならねえと知りながら、正義のためにや、兄弟、やつぱり一步も退けねえものなあ。」

「だがまあ聞かうぢやないか、一體どうしてそんな事になつたんだね？」

「うむどうしてつて……。彼奴め何から何まで検査しやがつたんだ、わざわざトロッコを降り

て、小屋の中まで覗きやがったんだ。てつきり小喧しいことを抜かすだらうとは、こつちも覺悟の前だった。だから萬事手抜かりなく整頓しといたのよ。そこでまあ無事にトロッコへお戻りにならうとした矢先に、俺が例の直訴をもち出したといふ譯さ。いや奴さん、聞くが早いかか鳴り立てたぜ。『いやしくも』つて抜かすんだ、『政府の檢閲があるといふのぢやぞ、それを何といふ奴だ、野菜畠の不服なんぞを持ちだすとは！』と、かうなんだ、『三等官の方々がお見えになるといふんぢやぞ、それをお前はキャベツのことなんぞをつべこ言ひをる！』俺は腹を据ゑ兼ねて、つい厭がらせを言つちまつた。なあに別に大したことぢやないんだがね、それが妙に奴さんの氣に障つたんだな。いきなりぶうんと拳固が飛んで來た……だが俺はじつと齒を喰ひしばつてゐた、さうされるのが理の當然だといつた風にな。奴等が行つちまふと、俺ははつと氣がついて、顔の血を拭くと、かうして出掛けて來たのよ。」

「で、小屋の方はどうするつもりだい？」

「嫌が残つてらあな。あれが抜目なくやつて呉れらあ。それに奴等がどうならうと、奴等の線路がどうならうと、俺の知つたことぢやねえしな！」

ヴァシーリイは立ちあがつて、身支度をした。

「あばよ、イヴァーヌイチ。訴へが聴き届けて貰へるかどうか、分かんねえけどなあ。」

「お前さん徒歩で行くつもりかい？」

「停車場で貨車に乗つけて貰ふつもりだ。明日はもうモスクヴァさ。」

隣り同志は別かれを告げた。ヴァシーリイはそのまま出掛けて行つて、なかなか戻つては來なかつた。女房は彼の代りに、晝はもとより夜の目も寐ずに働いた。亭主の歸りを待ちわびて、げつそり寝れてしまつた。三日目になると檢閲の一行がやつて來た。機關車に手荷物車が一輛、それに一等車が二輛ついてゐた。だがヴァシーリイの姿は相變らず見えなかつた。四日目にセミヨンは、彼の女房を見かけた。顔を泣き腫らして、眞赤な眼をしてゐた。

「御亭主は戻りなすつたかね？」と訊いてみた。

女房は片手を振つて見せると、ひと言も口を利かずに、自分の小屋の方へ行つてしまつた。

セミヨンはその昔、まだ頑是ない子供のころに、猿柳の枝で笛を作ることを知り覚えてゐた。柳の枝の芯を焼きぬいて、要所々に錐で孔をあけ、一方の端に歌口をこしらへると、見事に音色をととのへて、何なりとお望みの曲が吹けるやうに仕上げるのだつた。彼は役目の暇々にさうした笛を澤山つくつて、懇意な貨物列車の車掌にたのんで、町の市場へ出して貰つてゐた。一本

あたり二コペイカのお錢あしになつた。あの検閲があつて三日目に、彼は夕方六時の汽車の見張りに女房を小屋にのこして、自分は小刀をもつて、柳の枝を仕入れに森へ出かけた。受持區域の外れはらまで来ると——そこで線路は急カーブをしてゐた——彼は土手を降りて、森の木の間をだらだらと下りて行つた。半露里ほど先に大きな沼があつて、その畔りに例の笛の材料にはお誂へむきの見事な猿柳の叢林やぶがあつた。彼は一抱へほども枝を切ると、そのまま家路についた。森の中をわけて行く。日はもう西に傾いて、あたりはひつそりと死んだやうな静けさ。聞こえるのはただ、チチと呼びかはす鳥の聲と、足もとに踏みしだいてゆく枯枝の響きだけだつた。それから少し行つて、間もなく線路の土手に出るといふあたりで、何かほかの物音が聞こえるやうな気がした。どこかそこらで、鐵と鐵とがかすかに打ち合ふやうな音だつた。セミヨーンは足を早めた。その日ごろ彼等の受持區間に修理は行はれてゐなかつた。『あの音は何だらう？』と心に思つた。やがて森の外れへ出ると、眼の前は見上げるやうな鐵道の土手だつた。その土手の上に一人の男がしゃがみ込んで、しきりに何かやつてゐた。セミヨーンはそつとその男の方へ登つて行つた。どこかの奴が止め振子を盗みに來たんだなと思つたのだ。じつと見てゐると、やがて男は立ちあがつた。手には鐵槌かたてこ子こを握つてゐた。つまり鐵槌子かたてこでもつてレールの床とこを緩めて、外れるやうにした譯だ。セミヨーンは眼のなが暗くなつてしまつた。喚かうとしたが、聲が出なかつた。それ

がヴァシーリイだと見てとると、彼は逸散に駆けあがつたが、相手は鐵槌子と振子廻しを抱へたまんま、土手の向ふ側から鞠のやうにころげ降りてしまつた。

「ヴァシーリイ・ステパーヌイチ！ お願ひだ、いい子だから戻つて來て呉れよう！ 鐵槌子を借して呉れよう！ レールを直すんだ、誰にも知れやしないんだ。戻つて來て呉れ、畜生道へ落ちないで呉れよう。」

ヴァシーリイは振り向きもせず、森の中へ逃げ込んでしまつた。

セミヨーンは外されたレールの傍につつ立つてゐた。抱へてゐた枝束をどきりと落とした。今度の列車は貨物ではなくて客車なのだ。停車させようにも手立てがなかつた。旗がないのである。レールを元通りに直さつても、素手では大釘も打てはしない。かうなつたら駆けだすほかはない、何か道具をとりて小屋へ駆けつけるほかはない。神様、お助けください！

セミヨーンは自分の小屋をさして走つた。息ぎれがする。それでも走つた——へたへたと今にも前へつんのめりさうになる。やつと森を駆け抜けて、有難や小屋まではもう二町そこそこだと思つた途端に、ふと耳に工場の汽笛ほおの鳴るのが聞こえた。六時だ。六時二分には列車が來る。ああ神様！ 罪なき人々の命をお救ひ下さい！ 祈るひまにもセミヨーンの眼にまざまざと浮かぶのは、機關車が左の車輪をレールの切れ目に引つけて、ぐんと一揺れ、たちまち横へ傾いで、

枕木を蹴やぶり、木つ端みじんに撥ね散らす光景だ。おまけにあすこはカーヴだ、曲り角なのだ、それに高い土手と来てゐる。列車はあはやといふ間もなく、十二三間もの谷底へ逆落とした。その三等車には、ぎつしりと鮎づめの客、なかにはいたいたいけな子供もゐよう……。それが皆んな今、一寸先の危難も知らずに坐つてゐるのだ。神様、どうすればいいのかお教へ下さい！……ああもう遅い、小屋へ駆けつけてそれから現場へ戻つたんぢや、とても間に合はない……。

セミヨーンは小屋まで駆けつけぬうちに、くるりと後ろ向きになると、前より一層の速力で駆けだした。殆んど無我夢中で、この先どうなることやら自分でも知らずに、ひた走りに走つた。外されたレールのところへ駆け戻つて見ると、例の枝がうづ高く散亂してゐた。彼は身をかがめて、その一本を引つつかむと、何の心算かは自分も知らずに、そのまま先へ駆けだした。もう列車の近づく氣配がしてゐた。遙かに汽笛の音がきこえ、レールが微かに規則正しい震動を傳へはじめてゐた。もうそれ以上は走る力がなかつた。彼は怖ろしい場所から百間あまりの所で立ちどまつた。その時ふと、一條の光明がさつと頭に閃いたのである。彼は帽子をぬぐと、その中から木綿のハンカチを取りだした。それから長靴の胴へ手を入れて、小刀を取り出した。そして十字を切つた、——『主よ、恵みたまへ！』と。

その小刀を彼は矢庭に、自分の左の二の腕へつつ刺した。血はさつと噴きでて、熱い流れをな

して迸つた。彼はその血潮にハンカチを浸して、皺をのばして擴げると、枝の先に結へつけて、わが血に染めた赤旗をかかげた。

彼はつつ立つたまま、その旗をしきりに打ち振る。汽車はもう見えてゐた。旗は機關手の眼にはいらぬと見え、ぐんぐん汽車は近づいて来る。ここまで来たらもう最後だ——百間あまりの距離では、あの重たい列車が停められるものか！

血はあとからあとから噴きでてくる。セミヨーンは傷ぐちを小脇へ押しつけて、口を塞がうと思ふのだが、血はいつかな止まらない。どうやら腕を深く切つたと見える。そのうちに眩暈がして来た。眼のなかに黒い斑の影がちらちらし出したかと思ふと、やがて眞の闇になつてしまつた。耳の中ではがんがんとしきりに鐘が鳴る。彼にはもう汽車の姿も見えず、その轟きも聞こえない。頭に渦まく考へはただ一つ——『もう立つてはをられぬ、俺は倒れる、ああ旗が落ちる。あの汽車は俺のところを走り抜けるんだ……お助け下さい、主よ、誰か代りを早く……』

と思ふうちに眼のなかは暗くなりだし、心は空ろになつて、彼は旗をとり落とした。しかし血染めの旗は地面へ落ちはしなかつた。何者かの手がむんずとそれをひつ掴むと、轟々と近づいてくる列車に向かつて高く振り上げたのだつた。機關手はそれを認めて、調整器の瓣をとちると、蒸氣を切りかへた。列車はとまつた。

車室からどやどやと飛びだして来た人々が、たちまちまはりに黒山をきづいた。見ると、全身あつしに染まつた男が、氣を失つて倒れてゐた。もう一人の男はその傍に、血だらけの襪履布のついた棒を握つて佇んでゐた。

ヴァン・リイはぐると一同を見廻すと、そのまま首をおとして、

「あつしを縛つてお呉んなさい」と言つた、「あつしがレールを外したんだ。」

夢
が
た
り

89

六月のある素晴らしい日のこと——但し素晴らしいと月並みなお断りをしたのは、列氏で二十
八度といふ温度だつたからですが——その素晴らしい六月のある午後のこと、どこも彼處もきび
しい暑さでした。なかでもつい四五日まへに刈入れの済んだ乾草が、禾堆いねむらをなして並んでゐる庭
の草場は、またひとしほの暑さでありました。といふのはその場所が、茂りに茂つた櫻畑で、風
上を遮られてゐたからなのです。生きとし生けるものは、大てい寐入つてをりました。人間ども
はどつさり御飯をつめ込んで、晝寝の夢をむさぼつてゐましたし、小鳥も鳴りをひそめてゐます
し、昆虫たちも大抵は日ざしを避けて、どこかへ潜り込んでゐたほどでした。家畜のことは申す
までもありません。大きな家畜も小さな家畜も、みんな檐下のきしたにかくれてをりました。犬はどうか
と言ひますと、穀倉の下に穴を掘つて、その中に寝そべつて、半ば眼を閉ぢたまんま、一尺あま
りもありさうな桃色の舌を吐きだして、しきりにハアハアいつてをりました。ときどき犬は、こ
のうだるやうな暑氣のもよほす物憂さに堪へかねてでありませう、咽喉の奥からキューンと妙な
音が出るほどの、大きな欠伸をするのであります。豚はどうかといひますと、お母さんが總勢
すぐつて十三匹の仔豚を引きつれて、小川の岸へ下りて行つて、ぶくぶくした黒い泥んこの中に

蹲つてしまひましたので、泥の中から見えるものといつたら、ブウブウグウグウ鳴つてゐる小さな孔が二つづつあいてゐる豚の鼻面と、泥んこになつた細長い背中と、それに垂れ下がつてゐる見つともないほど大きな耳だけでありました。ただ鶏だけは、暑さにもめげずに、臺所の登り口の下の中から乾いた地面を、しきりに趾でほじくりながら、どうにか時間つぶしをしてゐましたけれど、そこにはもう鶏たちも先刻ご承知のとほり、穀粒ひとつだつて残つてはゐないのです。とは知りながらも、雄鶏はときどき何か癩にさはることがあると見えます。その證據には、雄鶏はときどき間の抜けた様子をして、咽喉もさけよと叫び立てるのでした、——『結構ドコロヂャアリヤナイ!!』

おや、いつの間にか私達は、あの一ばん暑さのきびしい草場を離れて遠くへ来てしまひました。が、實はその草場には、晝寝もせずにあるお歴々が、車座になつて坐つてゐたのでした。といつても皆んなが皆んな坐つてゐたわけではありません。例へば年寄りの栗毛などは、馭者のアントンの鞭を横つ腹へ喰らひはしまいかと絶えずびくびくしながら、乾草の山を掻き分けてゐるのですが、これは馬のことですから、もともと坐るなんて藝當はできないのです。またゆくゆくは何かの蝶になる毛蟲も、やはり坐つてゐるのではなく、まあ腹ん這ひになつてゐる方でした。でも言葉の穿鑿なんぞはどうでも宜しい。とにかく櫻の樹蔭に、小人数ではありますが、大へん眞面

目な曾合が開かれてゐたのでありました。蝸牛もあれば、糞蟲もゐます。蜥蜴もあれば、いま言つた毛蟲もゐます。蟋蟀も駈けつけて來ました。傍には年寄りの栗毛までが佇んで、鼠色の耳毛が中から勢ひよく生えてゐる大きな片耳を、一座の方へ欵たはだてながら、連中の演説をじつと聴いてをりました。その背中には、蠅が二匹とまつてをりました。

さて一座の面々は、言葉こそ鄭重ではありましたが、それでもかなり活氣のある議論を闘はしてをりました。且つまた、かうした場合の御多分に漏れず、誰一人として相手の意見に賛成するものはありませんでした。てんでに自分たち獨特の考へ方や氣質によつて、勝手な熱をあげてゐたからであります。

「私に言はせると」と、糞蟲が申しました、「いやしくも道みちを辨へた動物は、まづ何よりも子孫のことに思ひを致すべきです。生活は來たるべき世代のための勞働なのである。かうした自覺を抱いて、大自然が己れに課し與へた義務を果たさうとする者こそ、確乎たる地盤のうへに立つ者と言ふべきであります。けだし彼は己れの分ぶんを知るがゆゑに、たとへ何事が起こらうと、彼は責任を問はるべきではないからであります。この私を御覽なさい、私ほどよく働く者がほかにありますか？　そもそも誰が日がな一日、息をつく暇もなしに、あのやうに重い團子を——すなはち、やがて生まるべき私同様の糞蟲たちが、すくすくと生長し得るやうにとの大目的を以て、糞を材

料に私が斯くも手際よく作りあげた團子を、せつせと轉がしてゐるではありませんか？ しかもその代り私は、やがてこの世に新しい糞蟲が生まれ出るとき、『然り、わが輩は爲し得るところのものを、また爲すべかりしところのものを、悉く爲しとげたのだ』と私が言ふであらうやうに、かくも平らかなる良心をもつて、また一點の曇りなき衷情をもつて、言ひ切れる者が他にあらうとも思はないのであります。諸君、勞働とは實にかくの如きものであります！」

「おつと兄弟、さう勞働々々と大きな口を滅多に利いては貰ひますまいぜ！」と、ちやうど糞蟲の演説のとき、丸太ほどもある枯草の莖の切れつばしを、暑さにもめげず曳きずつてゐた一匹の蟻が、さう申しました。蟻はちよつと立ちどまつて、四本の後脚で地面に坐り、蹙れた顔にしたたる汗を、二本の前脚で拭きました。——「僕だつて、そら、この通り勞働はするんだぜ。それもお前さんなんかより働きは激しくらゐだ！ それにお前さんは自分のために働くんだらうでないまでも結局はお前さんの子孫のためだらう。ところが皆んなが皆んな、そんな果報者ぢやないんだぜ。……物は試した、まあお前さんもこの僕みたいに、お上の御用で丸太ん棒を曳きずつて見るがいいや。こんな着さの中まで、精も根もつき果てるほど働いてゐながら、さて何處のどいつが僕をかうまでこき使ふのやら、僕は自分でも知らないのさ。いくら働いてやつたところで、有難う一つ言つちや貰へないんだ。僕たち不仕合はせな働き蟻といふものは、みんなかう

して働いてるんだが、僕達の暮らしがそれで少しでもよくなるかい？ みんな背負つて生まれた運命なのさ！……」

「糞蟲さん、あんたみたいに人生を觀ちや、あんまり無味乾燥といふものですよ。だが蟻さんも、人生をあまり暗く考へ過ぎますねえ」と、蟋蟀が二人に反對しました。「そんなもんぢやありませんよ、糞蟲さん、僕はかうしてコロコロ啼いたり、跳ね廻つたりするのが大好きですが、それで一向平氣ですよ！ べつに氣が咎めたりはしませんよ！ それにまたあなたは、さつき蜥蜴の奥さんが提出なすつた問題に、ちつとも觸れなかつたぢやありませんか。奥さんは、『世界とは何でせう』とお尋ねだつたのですよ。だのに自分のお團子の話をするなんて、それぢや寧ろ失禮と言ふもんぢやありませんか。世界とは——世界といふものは、僕に言はせると、かうして僕等の爲めに若草があり、太陽があり、そよそよ風がある以上、頗る結構なものだと思ひますね。それにまた實に大きなものですよ！ あんたなどは、かうしてこの樹とあの樹のあひだを天地として暮らしてをられるから、世界がどれほど大きなものかと云ふことに就いては、とても理解が行く筈はありませんよ。僕はよく耕地へ行つて見ますがね、そこで時々、思ひつきり高く跳びあがつて見るんです。そして正直な話が、とても高いとこまで跳びあがれるんですがね、その高みから見渡すと、つくづく世界には際限がないと思ひますねえ。」

「全くその通りぢや」と、分別顔で栗毛の馬が合鞭をうちました、「とはいふもののお前さん達はみんな、わしがこの歳までに見て来たものの、百に一つも見られはせんのおぢやよ。お氣の毒ぢやがお前さん達には、一里がどんなものぢややら見當がつくまい。……ここから一露里行つたところには、ルパーレフカといふ村がある。わしは毎日その村へ水を汲みに、樽を背負つて出掛けるのだ。だがあの村ぢや一ぺんだつて飼料を呉れたことがないな。それからまた別の方角には、エフィーモフカだのキスリヤコフカだのといふ村がある。この後の方には教會といふものがあるつてな、鐘がころんころんと鳴つてをる。その先はスヴィヤト・トロイツェエ村、またその先はボゴヤーヴレンスクぢや。ボゴヤーヴレンスクでは、行つたんに乾草を呉れるが、あすこの乾草は風味がよくない。だがほれ、ニコラーエフへ行くと——これは此處から二十八露里もある町ぢやがな、あすこの乾草はなかなか好えし、それに燕麥の御馳走も出るのぢや。ただどうも彼處へ行くのが厭でならんといふのは、あの町へ行くときは且那を馬車に乗つけて行くのでな、馱者といふものが且那の言ひつけでわし等を驅り立てるのぢや。いやその馱者の振りおろす鞭の痛い何のつて……。まだそのほかに、アレクサンドロフカ、ベロジョールカなどいふ村もあるし、ヘルソーンといふものもある——これも町ぢや。……ぢやが折角かうして話して聴かせても、お前がたにはさつぱり譯が分かるまいて……世界といふものは先づかうした物ぢや。それで全部と

は行かぬにしても、まあま、とにかく大部分ぢやよ。」

さう言つて栗毛は口をつぐみましたが、下唇だけはまだまだもぐもぐと動いてゐて、まるで何か咳いてゐるやうでありました。それは寄る年波のせむだつたのです。何しろもう十七歳でしたし、馬の十七といへば人間の七十七も同じことですから。

「折角の馬さんのお話ですが、私には何のことやらちんぷんかんですわ。それにまた正直のところ、別に分かりたいとも思ひませんの」と蝸牛が申しました、「私は牛蒡さへあれば結構なんですわ、有難いことに牛蒡は充分ありますのよ。だつてこれでもう四日も這つてゐますけど、まだ頂ける葉が盡きは致しませんものね。この牛蒡の向ふにはまた牛蒡が生えてゐますわ。その牛蒡のうへには、きつとまた蝸牛がとまつてゐるんでせうよ。私の申しあげたいのはこれだけですわ。上へだつて下へだつて、跳ねることなんか一切無用ですわ——そんな事はみんな、くだらない、いい加減な嘘つばちですわ。お行儀よく葉のうへに坐つて、その葉を食べてゐればいいんですわ。ああ、這ふのさへ面倒でなかつたら、とつくに貴方がたのところは御免を蒙つてゐるのにねえ。そんなお話を伺つてゐると頭痛がして來ますわ。頭痛がして來るだけですわ。」

「いや、お話中ですが、それはまた何故ですわね？」と、蟋蟀が遮りました、「喋るといふことは殊にそれが永遠だとか何だとか、まあさういつた類ひの立派な題目に關する場合、じつに愉快な

ことぢやありませんか。そりや勿論、世帯じみた生まれつきといふものもあります。その連中はただもう、如何にしてお腹をくちくするかといふことばかり、くよくよしてゐるんです。例へばあなただとか、またそこに居られる艶やかな毛蟲さんみたいにね。……」

「あら、いけませんわ、私をお構ひになつちやいけませんわ。お願いですからそつとして置いて頂戴、構はないで頂戴！」と、毛蟲は哀れつばい聲で叫びました、「私がかうして葉つ葉をいただくのは、未來の生活のためなんですもの。ただただ未來の生活のためなんですもの。」

「未來の生活のためとかお言ひだが、この先まだどんな生活があるのかね？」と、栗毛の馬がたづねました。

「まあ小父さん、あんたは知らないの、私が一ぺん死んで、だんだらの綺麗な翅をした蝶々になつて生まれ變ることをさ？」

栗毛も蠍もまた蝸牛も、さうとは知らずにゐたのですが、昆蟲たちはどうにか知つてだけはおりました。そこで一座の話はしばらくとだえました。誰一人として、未來の生活について條理の立つた文句の言へる者がなかつたからでありました。

「確乎たる信念には、よろしく敬意を拂ふべきですな——やがて蟋蟀が、コロコロ申しました、「まだ何か仰しやりたい方はありませんか？　あなた一つ如何です？」と、蟋蟀が二匹の蠅に

向かつて申しましたので、年上の方がかう答へました。

「私どもは、べつに不仕合はせな暮らしをして参つたとも申せませんわ。私どもは今しがた、お邸の部屋から出て参りましたの。ちやうど奥様がジャムを澤山に煮て、浅い鉢に分けていらしたので、私どもは蓋の下へもぐり込んで、どつさり頂戴しましたわ。私どもは何の不足もございません。お母さんはジャムに脚をとられてしまひましたけど、今更どうしやうもありませんわ。それにお母さんはもう随分と長生きをしたんですものね。とにかく私どもは何の不足もございませんわ。」

「皆さん」と蠍が申しました、「あたくしは、皆さんの仰しやることは一々ご尤もだと存じます！　しかしまた、一面から申しますと……」

けれど蠍は、一面から言ふとどうなるのか、その先はたうと言はず仕舞ひになりました。なぜといつて、そのとき不意に何ものかが、彼女の尻尾をぎゅつと地面へ壓しつけたのを、感じたからでありました。

それは晝寢の夢からさめた馭者のアントンが、栗毛を迎へにやつて來たのでありました。アントンが大きな長靴で、その會合の席へ踏み込んで、一座の者を壓しつぶしてしまつたのでありました。無事だつたのは二匹の蠅だけで、これはジャムだらけになつて死んでしまつた母親のから

だを舐ぶりに、さつさと飛んで行きましたし、一ぱう蜥蜴は命からがら、尾をちよん切られたままで逃げ出しました。アントンは栗毛の鬘をつかまへて、庭から引き出して行きました。それは樽をつけて水を汲みに行くためでした。途々アントンは、『ドオドてはよお、ええ、このよぼよぼの瘦せ馬め！』と口小言をいふのでしたが、栗毛はその返事にただもくもくと口を動かすだけでした。

さてあの蜥蜴は、尾なしの蜥蜴になりました。尤も二三週間すると、尻尾がまた生えはしました。生えた尾は何時までたつても變に先つぼの尖がつてゐない、黒つぼい尻尾でありました。で蜥蜴は、一たいどうして尻尾に怪我をしたのかと尋ねられますと、小さくなつてかう答へるのでありました。

「あたくしは自分の信念を述べようと決心したばかりに、かうしてちよん切られてしまひましたの。」

まつたく蜥蜴のいふ通りでした。

アッタレーア・プリンケプス

とある大きな町に植物園があつて、園内には、鐵骨と硝子づくりのとても大きな温室がありました。大そう立派な温室で、すんなりと恰好のいい渦巻形の圓柱が列をなして建物の重みを支へ、その圓柱には、枝葉模様をきざんだ^{アチ}迫持が、かるがると靠れかかつてをりました。その迫持のあひだには、鐵の杵どりがさながら蜘蛛の網のやうに一面に組みあげられて、それに硝子が嵌めこんでありました。とりわけ太陽が西に沈みかけて、赤々とした光を浴びせかけるとき、この温室はまたひとしほの美しさでありました。そのとき温室は一面にばつと燃えたつて、眞紅の照りかへしがきらきらと五彩に映えわたる有様は、さながら細かに^{こま}磨きをかけた巨きな寶石を見るやうでありました。

透きとほつた厚い硝子ごしに、なにか閉ぢこめてある植物の姿が見えるのでありました。ひろびろした温室ではありましたが、それでも中にある植物たちにとつては窮屈でありました。根といふ根は互ひにまつはりついて、お互ひの水氣や養分を奪ひ合ふのでした。樹々の枝は、とても大きな棕櫚の葉と入れまじつて、それを押しひしやげたり、裂きやぶつたりしてある一方では、自分たちもてんでに鐵の杵へのしかかつて、曲がりくねつたり折れたりしてをりました。園丁た

ちは休む間もなしに樹々の枝を刈り込んで、棕櫚の葉の方は針金でからげ上げて、勝手きままに伸びさせないやうにするのでしたが、それでも大して利き目はありませんでした。草木の身にしてみれば、ひろびろとした天地が、生まれ故郷が、そして自由が要るのでありました。その植物たちは熱帯地方の産で、榮耀な暮らしに慣れた華奢な生まれつきでしたから、故郷のことが忘れられず、南の空が戀しくてなりませんでした。硝子ばりの屋根がいくら透明だといつても、それは暗れわたつた大空ではありません。多になれば、時をり硝子の凍りつくこともあります。すると温室のなかは眞暗になつてしまひます。風は吼えたけつて、鐵の枠につき当たり、びりびりと顫はせるのであります。屋根には雪の吹き溜まりがかぶさつてしまひます。草木は佇んだまま、吼えたける風の音に耳を澄ましては、自分たちに生氣と健康を吹きこんで呉れる、これとは違つて暖かい、しつとりと濡れた風のことを思ひ出すのでした。するとまたあの風の息吹きに觸れてみたくなるのでした。あの風に自分たちの枝をそよがせ、自分たちの葉をさらさらいほせて見たくなるのでした。ところがこの温室のなかの空氣ときたら、ひそりともしないのです。尤も時々ま多の暴風が硝子を吹きやぶつて、霧氷を一ぱいに含んだ身を切るやうな冷氣が、圓天井の下へどつと流れ込むときは別でしたが。その冷氣の流れに打たれたら最後、葉は色つやを失くして、縮くれあがつて萎れてしまふのでした。

けれど割れた硝子はいち早くとり換へられるのでした。この植物園の園長さんは立派な學者で、温室の本館のなかに別に設けてある硝子張りの研究室にとちこもつて、顯微鏡を相手に自分の時間のあらかたを過ごすのが常でしたが、さりとて温室のなかを亂雑にして置くことは一切ゆるさなかつたのです。

植物たちのなかには一本の棕櫚があつて、脊丈も一ばん高く、美しさも一きは立ちまさつてをりました。研究室に坐つてゐる園長は、この樹をラテン語でアッタレーアと名づけてゐました。しかしこれは彼女が生まれ故郷で呼ばれてゐた名ではなくて、植物學者が考へだした名でありました。産地についてゐた名を植物學者は知りませんでしたので、棕櫚の幹のところ打ちつけてある白い板には、その名は墨で書いてはありませんでした。或るときその棕櫚の木の育つた暑い國から遙々海をわたつて來た旅人が、植物園の參觀に來たことがありました。その旅人は彼女を見かけるとにつこり笑ひました。故郷のことが思ひ出されたからでありました。

「おや！」と旅人は言ひました、「私はこの木を知つてゐる。」——さうして産地にゐたころの彼女の名を呼びました。

「失禮ですが」と、ちやうどそのとき何かの草の莖を、一心にメスの刃で切りこまざいてゐた園長が、例の研究室のなから呼びかけました、「あなたは思ひ違ひをしておいでです。今あなた

が仰しやつたやうな木なんか、この世の中にありはしません。それはブラジル産で、アッタレーア・プリンケプスといふのです。」

「はあ、なるほど」とブラジル人は答へました。「植物学者がこれをアッタレーアと呼んでゐることは、いかにも仰しやるとほりでせう。しかしまたこの木には、産地についてゐる本當の名があるのですよ。」

「學問上ついてゐる名が本當の名なのです」と植物学者は無愛想に言ひすてて、研究室の硝子戸をびしやりと閉めてしまひました。一たん科學者が物を言ひかけたら、黙つて拜聴するものだといふことさへ心得てゐない人間に、仕事の邪魔をされなくなかつたからでありました。

けれどブラジル人は何時までもそこに佇んで、その木を眺めてをりました。そしてだんだん悲しい氣持に落ちてゆきました。旅人は故郷のことを思ひだしたのです。あの太陽や青空を、珍しい鳥や獸の棲んでゐる豊饒な森を、あの沙漠を、あの妙なる南國の夜を、思ひ出したのです。それからまた、自分は世界ぢゆう隈なく遍歴つて見たものの、生まれ故郷にゐたときのほかは、どこにゐても幸福な氣持になれなかつたことも、思ひ出されたのでありました。旅人はさながら棕櫚の木と別かれを惜しむかのやうに、片手でそつと木の膚にさはつて見てから、植物園を出て行きました。そして翌る日はもう、故郷へ向けて出帆したのでありました。

105

スプケンリブ・アーレタツア

が棕櫚の木は置いてきぼりです。これまでも随分と切ない思ひをしてゐたのに、今ではなほのこと切なさが募るのでした。彼女は全くの一人ぼつちだつたのです。彼女はほかの草木の頂きを六間ちかくも抜いて聳えてゐましたので、下にゐる植物たちは彼女を憎み羨んで、何て傲慢な女だらうと思つてゐました。人並はづれて身丈の高いといふことは、結局彼女にとつては悲しみの種になるだけでした。それも、皆んなはああして一緒に暮らしてゐるのに、自分だけは一人ぼつちだ——と云ふことだけならまだいいのですが、なほその上に、なまじ脊のたかいお蔭で、植物たちにとつて大空の代りになつてゐるもの、つまりあの忌々しい玻璃屋根に、誰よりも一ばん近いものですから、彼女の胸には誰よりも深く故郷の青空のことが刻まれて、人一倍それが戀しく懐かしかつたのです。その玻璃屋根ごしに、時をりは何かかう青い色が見えるのでした。それは蒼穹でありました。見知らぬ國の、色褪せた空ではありましたが、でもやつぱり青空には違ひありませんでした。で、草木たちがてんでにお喋りをしてゐる時、アッタレーアはいつも黙り込んで、空を慕つてをりました。たとひあの色褪せた空の下でもいい、ちよいと表へ出て佇むことができたならどんなにいいだらうと、そればかりを思つてをりました。

「ねえ皆さん、どうでせうね、もうおき水を掛けて貰へるんでせうかしら？」と、水氣の大好きなサゴ椰子が尋ねました。「あたくしもう、ほんとに今日は乾あがつてしまひさうですよ。」

「いやあ、あんたの言はれることには、ほとほと驚き入りますなあ、お隣りさん」と、太鼓腹の仙人掌サボテンが申しました。「毎日あんなにどつきり水を掛けて貰つてゐる癖に、それでもまだ不足だと言ふんですかね？ まあこの私を御覽なさい。私はほんの僅かの水分しか頂戴しちやみませんがね、でも御覽のとほり艶々と、みづみづしてをりますよ。」

「あたくしどもはあんまり儉約けんやくしい暮らしには慣れとりませんのでねえ」と、サゴ椰子は答へました。「あたくしどもは何處やらの仙人掌さんみたいに、からからに乾いたみすぼらしい地面ぢや、育たないんでございますよ。あたくしどもは、かつがつの暮らしなんぞには慣れてをりますんの。それに、これははつきりお断りして置きますけれど、誰もあなたの御意見なんぞお願ひしてはをりませんわ。」

と言つて、サゴ椰子はつんと黙つてしまひました。

「あたしのことを申しますとね」と、肉桂が口を出しました。「あたしは現在の境涯にまづまづ満足ですわ。そりや此處は退屈といへば退屈ですけれど、その代り誰にも皮を剥がれずに済むことだけは、安心してゐられますもの。」

「とは仰しやるがね、私ちどもは何も皆んなが皆んな、皮を引つ剥はがれて来たわけでもありませんぜ」と、まるで木のやうな恰好をした大きな蕨わづらが申しました。「そりや勿論、皆さんのうちに

は、こんな牢屋暮らしが極樂かくらくみたいに見える方も、澤山おいでせうがね。何しろ自由の身だつたといつても、みじめな暮らしをして来たんですからねえ。」

すると肉桂は、皮を剥がれた昔のことも忘れて、おこつて言ひ合ひを始めました。肉桂の肩をもつ草木もあれば、蕨の味方をする草木もあるといふわけで、わいわいと大變な喧嘩になつてしまひました。もし手足が動かせるのでしたら、きつと擲りあひになつたに相違ありません。

「何だつて喧嘩けんわなんかなさるの、皆さん」とアッターレーアが申しました。「それで御自分たちの不幸を増すだけの話ぢやありませんか。喧嘩なんかはやめにして、大事なことをお考へなさるがいいですわ。まあ私のいふことを聽いて頂戴。みなさんは、もつと高くもつと廣く、ぐんぐんお伸びになるがいいわ。枝を伸ばして、あの杵きねや硝子びやうしを押しあげるんです。さうすればこの温室かほくなんぞは木つ端はなみじんみじんに消し飛んぢまつて、あたし達は自由の天地へ出られるといふものですわ。一本やそこらの枝で突つばつて見たところで、ちよきんと剪られてしまふのが落ちでせうけど、百本もの力づよい勇ましい幹かみが、總もがかりで突つばつたとしたらどうでせう？ もつと氣を協きせて働はたらきさへすれば、勝利はあたし達のものですわ。」

はじめのうちは誰ひとり、棕櫚そうじゆに異議を申し立てるものはありませんでした。みんな黙り込ん

で、何と挨拶したものが迷つてゐたのです。やがてサゴ椰子が覺悟のほぞを決めて、

「そんなの馬鹿げきつた話だわ」と、言ひ放ちました。

「馬鹿げた話だ！ 馬鹿らしい話だわ！」と草木はてんでにがやがや言ひ出して、アッタレーアの提案なんぞ愚にもつかない寢言だといふことを、われがちに證明しようとかかるのでした。

「——とんでもない空想だ！」と草木は叫ぶのでした。「ばかばかしい！ 夢みたいな話だ！ 鐵杵は頑丈なんだ。あれを毀さうなんて、とても出来るもんぢやない。それにまた毀せたとこで一たい何になる？ 人間たちが鋏や斧を持つてやつて来て、枝をちよん切つてしまふだらう。杵の破れ目は塞いでしまつて、また元の李阿彌になつちまふだらう。いや、折角ちやんとついでる手足を、むざむざちよん切られるだけ損だよ……。」

「ぢや、好きになさるがいいわ！」とアッタレーアは答へました。「かうなつたらもう、私にも覺悟があります。あなたがたにはまあ構はずそつとして置ませうよ。どうなりと好きに暮らしたさるがいいわ。愚痴をこぼし合つたり、水の呉れ方が多いとか少いとかで喧嘩をしたり、まあ何時までもさうしてこの硝子蓋の下に居残つてなさるがいいわ。私はたとひ一人でも、自分の道を切り拓きますわ。私はこんな鐵格子や硝子ごしにはなく、ぢかに青空と太陽が見たいんです。——いいえ、見ないで置くもんですか！——」

さういふと棕櫚は、まるで翠みどりの小だかい峰のやうに、眼の下にひろがつてゐる温室仲間の林を傲然と見おろしました。仲間はずひとりとして、彼女に言葉を返す勇氣のあるものはなかつた。ただサゴ椰子が隣りの蘇鐵に向かつて、小聲でかう言つただけでした。

「まあ見てみませうよ。お前さんの自惚れがいい加減でやまるやうに、その憎たらしい大頭のちよん切られるところを、ゆつくり拜見するとませうよ。本當に高慢ちきな女だわ！」

ほかの草木は黙つてゐましたが、心の中ではやはり、アッタレーアの横柄な言葉に腹をたててをりました。ただここに一本の小さな草があつて、その草だけは棕櫚の態度に腹もたてなければ、彼女のお談義に氣を悪くしてもおぼせませんでした。それは温室ぢゆうの草木のなかで一ばん惨めな誰にも相手にされないやうな小さな草でありました。ひ弱な、色つやのない匍ひ草で、厚ぼつたい萎びた葉をつけてゐました。この草には別にこれといつて目だつた特徴もなく、ただ温室の床とこの裸か地を隠すために植ゑてあつたのでした。彼女は自分のからだを大きな棕櫚の根元へ巻きつけて、その言葉に耳を澄ましてをりましたが、なるほどアッタレーアのいふ通りだと思ひました。自分としてはべつに熱帯の大自然を知つてゐる譯ではないのですが、やつぱり大氣と自由は好きだつたのです。温室は彼女にとつても、やはり牢屋ひしやでありました。「私みたいなつまらない萎びた草でさへ、自分の育つたあの灰色の空や、蒼ざめた太陽や、冷めたい雨に逢へないのが、こん

なにも辛いんだもの。この見事な威勢のいい樹にしてみれば、囚はれの境涯がどんなにか切ないことであらう！』さう彼女は考へて、棕櫚の幹にやさしく纏はりついて甘えるのでした。『なぜ私は大木に生まれつかなかつたのだらう？ 大木に生まれてさへるたら、この人の忠告どほりにしたらうに。私たちは手に手をとつてぐんぐん伸びて、一緒に自由の天地へ乗り出せただらうに。さうなつたらほかの連中だつても、なるほどアッターアの言ふ通りだつたと、思ひ當たるに違ひないわ。』

けれど彼女は大木ではなくて、ほんの小つぽけな萎びた草でありました。ですから彼女にとつては、アッターアの幹にいいよ優しくまつはりついて、一か八か試みられようとしてゐるその幸福を、自分もどんなに愛してゐるか、どんなに望んでゐるかといふことを、彼女に囁くのが關の山だつたのです。

「今さら申すまでもないことですが、私たちの國はあなたのお國のやうに暖かでもありませんし、空も澄みきつてはゐませんし、また豊かな大雨が降るわけでもありません。けれど私たちの國にだつて、空もあれば、太陽も風もありますわ。私たちの國には、あなたやあなたのお友達のやうに、大きな葉やみごとな花をたわわにつけた、華麗な草木は見られませんわ。けれど私たちの國にだつて、松だとか樺だとか白樺だとか、とても立派な樹が生えてゐますわ。私は小つぽけ

な草ですから、とても自由なんぞ望めさうもありませんが、あなたはそんなに形も大きいし、力もおありですもの！ あなたの幹は丈夫ですし、それにあと一伸びすれば玻璃屋根にとどくんですわ。あなたは屋根をぶち抜いて、ひろびろした天地へ出て行けるに違ひありませんわ。さうしたらこの私に、大空の下は今でもやつぱり昔ながらの見事な眺めかどうかを、話して聽かせて下さいね。私はそれだけで満足しますわ。」

「ねえ小さな蔓草さん、お前さんはなぜ私と一緒に出て行かうと思はないの？ 私の幹は丈夫でしつかりしてゐるわ。私の幹に倚りかかつて、ここまで這ひのぼつてお出で。お前さんを背負つて行くぐらゐ、私には何でもないんだから。」

「いいえ、とても私には駄目ですわ！ だつてほら、私はこんなに萎びた弱い草なんですもの、蔓一本だつて持ちあげる力はありませんわ。いいえ、とても御一緒に参れませぬ。あなたは一人伸びて、幸福になつて下さい。ただ一つお願ひは、あなたが自由の天地へお出なすつたとき、時たまはこの小つぽけな友達のことを思ひ出して下さいね！」

そこで棕櫚は伸びはじめました。今までも温室を參觀にきた人々は、彼女のすばらしい身の丈に驚きの目をみはつたのですが、その彼女がひと月まします高くなつて行つたのです。園長はこのめざましい伸び方を、世話がよく行き届いたせゐにして、温室を經營して任務を遂行

してゆく上での、自分の見識を誇るのでありました。

「まあ一つ、そのアッタレーア・プリンケプスを見て下さい」と、園長は言ふのでした。「これほどよく育つたやつは、ブラジルへ行つたつて滅多には見られませんよ。私どもは、植物たちが温室の中にあつても、野育ちの場合と全く同様に思ふさま伸びられるやうに、知能を傾けたものですが、私にはどうやら、多少の成功を収めえたやうに思はれますよ。」

さう言ひながら、園長はさも得意さうな面もちで、ステッキをあげてその丈夫な木膚を叩いて見せるのでした。するとその音は、温室ぢゆうにびんびん響きわたるのでした。棕櫚はこの打擲に堪へかねて、葉をわなわなと顫はせるのでありました。おお、もしも彼女に聲があつたなら、どんなに物すごい忿怒の叫びを、園長は耳にしたことでありませうか。

「あの人は、あたしがかうして伸びるのを、あの人を喜ばせるためだと思つてるんだわ」と、アッタレーアは心に呟くのでした。「勝手にさう思ふがいい！」

そして彼女は、あらん限りの樹液をひたすら伸びるために使つて、根や葉にまはる樹液をまで奪ひながら、ぐんぐん伸びて行きました。時をり彼女には、圓天井までの距離が一向に縮まらないやうな気がするのでした。すると彼女は力いっぱいに氣ばるのです。さうかうする内に、梓はだんだん近くなつて、たうとう一枚の若葉が、ひやりと冷めたい硝子と鐵杵にさはりました。

「御覽よ、御覽よ」と草木はどよめき立ちました。「たうとうとどいちまつたわ！ 本當にやる氣なのかねえ？」

「まつたく怖かないほど伸びたもんだなあ！」と、樹みたいな恰好の蕨が申しました。

「へん、伸びたが何ですかね！ 何と珍妙な恰好ぢやありませんか！ これこの私みたいに肥れたら、それこそ大したもんですけれどねえ！」と、ビヤ樽みたいな胴をした、肥つちよの蘇鐵が申しました。「それにまた、ひよる長くなつたところで何になりますかね？ 結局なの一つできはしませんよ。格子は頑丈だし、硝子は厚いんですものね。」

また一と月たちました。アッタレーアはもつと高くなつて、たうとう仕舞ひには、びんと鐵杵につつばつてしまひました。もうそれ以上は伸びる場所がありません。そこで幹は撓ひはじめました。大きな葉のむらがり繁つた天邊のところは、もみくしやになりました。杵どりの冷めたい鐵棒が、柔らかな若葉の肌へくひ入つて、ずたずたに引き裂いたり、みじめな恰好に押しひしやばたりしましたが、棕櫚はたじろぎはしませんでした。葉がどうならうと、その身がどうならうと一切いとはず、ひた押しに格子を押しあげたので、さしも頑丈に鐵で組みあげた格子も、たうとうじりじりと撓ひはじめました。

ちひさな蔓草は、この闘ひの有様をじつと見守つてゐましたが、心配のあまり今にも氣が遠く

なりさうでした。

「ねえ、あんたそれで痛くはないこと？ 鐵棒はそんなに頑丈なんだから、いつそ引き退つた方がよくなるくつて？」と、小草は棕櫚にききました。

「痛いですつて？ 自由の天地へ出ようといふ一念の前に、痛いくらゐが何ですか？ 私を勵まして呉れたのは、そのお前さんだつたぢやないか？」と、棕櫚の木は答へました。

「ええ、勵ましては上げましたわ。だつてそれほど難かしいこととは、知らなかつたんですもの。お氣の毒で見ちやられませんわ。さぞ苦しいでせうにねえ。」

「おだまり、意氣地なしめ！ 私に同情してなんか貰ひますまい！ 私はもう死ぬか自由になるか、二つに一つです！」

とそのとき、天地を震はすやうな大きな音がしました。太い鐵の棒が一本はじけ飛んだのです。硝子のかけらが、がらがらつと音をたてて天から降つて來ました。かけらの一つは、丁度そのとき温室のそとへ出た園長の帽子に、こつんと當りました。

「こりや何ことだらう？」と園長は、きらきらと空中に散亂した硝子のかけらを見て、どきりとして大聲をあげました。そして温室をはなれて逸散に庭へ駆けだすと、屋根をふり仰いで見ました。みれば硝子の圓屋根のうへには、ぴんと頭をもたげた棕櫚の木の緑いろの冠が、誇りかに

聳えてゐるではありませんか。

『たつたこれだけの事か』と、その棕櫚は考へてをりました、『たつたこれだけの事のために、私はあんなに長いあひだ、つらい苦しい思ひをしたのかしら？ これんばかりの物を手に入れるのが、私にとつての最高の目的だつたのかしら？』

もう秋も深くなつてをりました。その頃になつてアッターアは、やつとあいた穴からぐいと頭をつき出したのです。雲まじりの氷雨が、しとしとと降つてをりました。身を切るやうな北風が、ちぎれちぎれの灰色の雨雲をひくく這はせてをりました。まるでその雲が兩手をひろげて、抱きついて來るやうな氣がしました。樹々はもうすっかり葉を振り落として、何だか見つともない死人のやうな姿をしてをりました。松と樅の木だけは、暗い緑いろの針葉をつけてをりました。さうした樹々が、陰氣な眼ざしで棕櫚を眺めてゐるのです。『凍え死んぢまふぞ！』と、樹々は彼女に言つてゐるやうでした、『お前は北國の寒さがどんなものだか、知りはしないのだ。お前にはとても辛抱はできまいよ。せつかく温室にゐたものを、何だつてまた出て來たんだ！』

そこでアッターアは初めて、とり返しのかない事をしてしまつたと悟りました。彼女は凍えさうに寒かつたのです。また屋根の下へ歸つてはどうでせう？ けれど今となつては、もはや歸るすべもないのです。彼女は寒い風の吹きすさぶなかに佇んだまま、どつと押しよせる風の重

さや、ひりひりと膚をかすめる粉雪の痛さをじつと忍びながら、汚ならしい色をした空や、みすぼらしい北國の自然や、植物園のむさくるしい裏庭や、狭霧の彼方に見えがくれする單調な大都會のたたずまひやを、眺めてゐなければならぬのです。下界の温室のなかで、人間たちが自分の後始末を相談してゐるあひだ、さうして待つてゐなければならぬのです。

園長は棕櫚の木を鋸で挽いてしまへと言ひつけました。「あの上にもうひとつ別の圓屋根を建て増してもいいが」と、園長は申しました、「だがそれも長いことはあるまい。あの木はまた伸びて行つて、やつぱり毀してしまふだらうよ。それにまた建て増すとすれば、お金もどつさりかかるからなあ。面倒だ、挽いてしまへ。」

棕櫚は太い綱で縛りあげられました。倒れるとき温室の壁を毀さないための用心でした。そしてすぐ根元のところから、鋸で挽かれてしまひました。その幹に巻きついてゐたあの小さな蔓草は、どうしても友達と離れたがらなかつたので、やつぱり一緒に鋸の齒にかかつてしまひました。やがて棕櫚が温室から曳き出されたとき、あとに残つた切株のうへには、鋸の齒に引きちぎられ、ずたずたになつた蔓草の莖や葉が、みだれ伏してをりました。

「この碌でなしも引つこ抜いて、棄ててしまふんだ」と、園長は申しました、「もう黄色つぼくなつてゐるし、それに鋸の齒でひどく傷んでしまつた。ここには何かほかの草を植ゑようよ。」

園丁の一人が手ぎはよく根もとへ鍬を入れて、ひと抱へもある蔓草をぐいと引つこ抜いてしまひました。彼はそれを籠のなかへ抛りこんで、裏庭へはこんで行きました。そして、今では泥濘のなかに横たはつて、もう半ば雪をかぶつてゐた棕櫚の亡骸のうへに、どさりと棄ててしまひました。

あとがき

あ　　と　　が　　き
ガルシンを語る人はかならずその印象ぶかい眼のことをいふ。それは睫毛のながい、ぱつちりした、茶色のよく澄んだ眼で、幼少のころから善良さと温順さと、そして一種の哀愁の色を湛へてゐたといはれる。それは彼が四歳のとき或る將軍から、「洗禮者ヨハネを思ひ出させる」と讃へられた眼であり、また晩年には畫家レーピンの名作『イヴァン雷帝とその皇子』において、父帝の手に殞れた皇子のまさに息たえんとする痛ましい眼光の、モデルになつた眼でもあつた。彼の藝術を語ることは、やがてこの眼の閱歴を語ることにほかならない。それは前世紀末の暗澹たる一時代に生きたロシヤ・インテリゲンツィアの良心の営みを、そのままに照り返してゐる眼だつたのである。

119
フセヴォーロド・ミハイロヴィチ・ガルシン Vsevolod Mikhajlovich Garshin は、一八五五年二月、南露エカテリノスラーフ縣なる母方の領地で生まれた。父方の家系は古く黄金汗國時代に發祥すると傳へられる小地主貴族である。胸甲騎兵の將校であつた父親とともに南ロシヤで過ごされた彼の幼年時代は、あたかもあの凄慘なクリミヤ戰役の直後に當たつてをり、従つて父の

家に集まる軍人たちの血腥い戦争譚に、彼の幼ない情感と献身愛とははげしく掻きたてられずにはゐなかつた。加ふるに頗る放任主義であつたらしい父親の膝下における早期の濫讀があつた。自傳によると五歳から八歳までのあひだの讀書は、ロシアの古典はもとより、ピーチャーストウ女史の諸作やユーゴーの『巴里の聖母寺』、また當時獄中にあつたチエルヌイシェーフスキイの急進的なユートピア小説『何を爲すべきか』にまで及んでゐたといふ。

一八六三年彼はペテルブルグに移り、やがて同地の中學校に入學したが、卒業の直前十七歳のとき最初の狂疾の發作に襲はれて、暫く精神病院に收容されなければならなかつた。この精神の疾患は母方の遺傳に根ざすものといはれてゐるが、より直接の素因が彼の幼時からの過敏な感性和外界印象との、激しい摩擦にあることは疑ひをいれない。

やがてやうやく中學を卒へた彼は、醫科大學志望を學制上の支障によつて斷念して、鑛業専門學校に入學した。このころの彼は、しきりに若い畫家の一團と交はつて、彼等に勵まされながら文藝上の試作に耽つた。彼が有名な畫家ヴェレシチャイギンの生々しい戦争畫から、強烈な印象を受けたのもこの時代のことである。畫家たちとの交遊の形見として、彼には生涯を通じて數篇の美術批評がある。

一八七六年バルカンが大いに亂れた。彼は從軍を願ひ出たが、適齡未滿の故をもつて許されなかつた。しかし翌年の四月いよいよ土耳其に對する宣戰が布告されると、彼は進級試験を抛つて一兵卒を志願し、直ちにブルガリヤの戦線へ向けての辛勞多い行軍に加はることができた。從軍

の動機はただただ、人々と苦難をともにせずにはをられない殉教的な衝動であつた。戰場で彼は勇敢な兵士だつた。前後二回の戰鬪に参加したが、一八七七年八月アヤスラルの激戰で左脚に負傷して、同月ハリコフの家に後送された。彼はこの療養中に、すでに野戰病院で書き始められてゐた作品を脱稿した。それが『四日間』*Chetyre dnja*で、同年十月、當時人^{ナロドニエニストロイ}民派の雜誌として權威のあつた『祖國時報』に掲げられ、異常なセンセーションを捲きおこした。

『四日間』は同じ隊の一兵卒の身におこつた怖るべき出來事に取材してゐる。彼はそれを戰場で屍體埋葬の勤務についてゐた際に親しく目撃したのである。彼自身の戦地における體驗を直接に物語つた作品としては、『一兵卒イヴァーノフの回想より』(八三年發表)及び『戦争情景』(七七年發表)がある。總じて彼の「戦争物」の特色は、普通人の眼には決してうつらぬ壯大な戦争繪卷を強ひて描かうとはしないことである。彼は純粹に一兵卒の眼をもつて、閃々として去來する「戦争の赤い翼」のはためきを、素直に記しとどめるのである。

作家としての道の開けたのを見て、彼はその年の末ペテルブルグに歸つて、創作に没頭した。この二三年間は彼が心身ともに健康にめぐまれて旺盛な創作力を示した時期で、『アッタレーア・プリンケプス』*Attalea princeps* (八〇年發表)はこの頃の所産である。これは後にも述べるやうに動植物の世界に舞臺を借りた一連の童話風の作品の一つであるが、その整つた形式によつてこの方面での彼の成功作とされてゐる。青空を慕つてやまぬ棕櫚の運命に託されたこの苦澁な比喩物語は、絶望的なアイロニイを湛へながら、暗澹たる時代の空氣につつまれた良心の苦悶を表

はしてゐる。これと同じ時期に書かれた作品には、『極めて短い物語』をはじめ、『臆病者』、『邂逅』、『畫家たち』、『一夜』など、歎歎と哀訴に貫かれた諸篇が數へられるが、なかんづく『從卒と士官』(八〇年、長篇の第一章として發表)は揺るぎない構成を具へて、チェーホフの零團氣ゆたかな短篇の先驅をなすかに見える佳作である。

しかし一八八〇年の二月、彼は再びはげしい狂疾の發作に襲はれた。このときの當軌を逸した行動の一例として、夜中の三時に突然、時の大官ロリス・メリコフを訪問したといふ話がある。この人物はまづ穩健な政策によつて政治犯の鎮壓に當たつてゐた獨裁官であるが、彼はその面前に跪いて號泣しながら、メリコフ襲撃の廉によつて捕へられて、極刑に處せられようとしてゐた一青年の命乞ひをしたのである。そして漸く宥められて辭去したのちも、絶望のあまり終夜、泥濘にまみれてペテルブルグの近郊を愚かれた者のやうにさまよつたのであつた。この挿話は、哀憐の重みに堪へずに狂氣してゆく彼の姿をよく物語るものであらう。彼はふたたび精神病院の門をくぐり、その後一年あまりを叔父の田莊に病を養つた。厭世的な基調のうちに明るい諧謔をまじへた『夢がたり』『То, chevo me bylo』(八二年發表)は、この療養期の所産である。

『夢がたり』は、『アッタレーア』などと並んで、動植物の世界に假託された童話の形式を持つてゐる。ガルシンがかうした童話形式に寄せた愛好は、つとにウスペンスキイも指摘してゐるやうに、この作者獨特の生活印象への異常な敏感さによつて説明しうるであらう。すなはち彼の病める神経は、生活事象を逐一精細に記述する重荷に堪へられず、それら印象の壓迫からの急速な

解放を、比喻の世界に求めたものであらう。例へば『夢がたり』のごとき、文字どほり掌大の小作品でありながら、そのうちに作者が觸れようと試みてゐる人生の面の夥しさに、われわれは驚くのである。

一八八三年、彼はナヂェージダ・ゾロチーロヴァといふ女醫學生を妻にむかへた。これは心身ともに病みつかれた彼の後半生にとつて、母とも姉とも、また保母ともなつた女性である。彼はまた官途について、ここに東のまの平安が訪れることになつた。この時期の作品には、『紅い花』*Красный цветок* (八三年發表)、『熊』(同じく)などがある。

『紅い花』はハリコフの精神病院における作者自身の痛ましい體驗を布地として、これに『悪』との闘ひに身を滅ぼす一インテリ青年の悲劇を縫ひとつたものであり、ガルシンの全作を通じて最も調子の高い、彼の正義感の力づくよく流露した作品として許されてゐる。またこれを精神病院の側から見ても、當時の精神病醫シッコルスキイ等も指摘したやうに、狂躁状態の内面描寫——殊に正常な意識と病的な意識との並存状況の精緻さはまる浮彫りにおいて、古典的價値を有するものとされてゐる。この作品はやがてチェーホフの『六號室』などによつて承けつがれる一系の癡狂院小説の、きららかな源泉をなすものであつた。

なほこのころ彼は、ピョートル大帝の時代に取材する歴史小説をもくろんで、しきりに材料の蒐集に努めたけれど、ほどなく痼疾が悪化したため、この計畫はつひに實現されなかつた。すなはち一八八四年からのち、彼は毎年の春から夏にかけて、救はれがたい憂鬱症——數箇月にわた

つて持續する無興味と無氣力と不眠症——に定期的に見舞はれるに至り、漸く創作時における精神の緊張に堪へず、作品の数は目に見えて減つて行つた。この最後の時期の所産としては、量的には最も大きく、質的にはかなりの弛緩を示してゐる作品『ナヂェージダ・ニコラーエヅナ』のほか、一二の民話の試みがある。

『信號』Signal (八七年發表) は明らかに、當時相ついで發表されてゐたトルストイの民話の刺戟によつて書かれたものである。とはいへ彼がトルストイに學んだのは民話の特質をなす素材で通俗的な表現精神であり、その根柢に横たはる教義に至つては、ガルシンの全く認容しがたいものがあつたのである。『信號』には、あらゆる悪條件の累積にも拘はらず、なほ人間の犠牲の力への燃えるやうな信念を棄てえぬガルシンの心情が、最後の歌をひびかせてゐる。

一八八八年三月、痼疾の漸く重るのを感じた彼は、遂にコーカサスへの轉地療養を決心したが、その出發の朝、迫りくる發狂の恐怖に脅やかされて發作的に階段の上から飛降り自殺を圖つた。そして脚部に致命傷を負つて、五日にわたる苦悶のうちに息を引きとつた。臨終の床を見舞つた友人の「痛むか」といふ問ひに、彼は心臓を指さしながら、「ここの苦しみに比べれば、こんな痛みは何でもない」と答へたと傳へられる。

ガルシンの生涯と藝術が、「異常にとぎすまされた道徳的敏感さ」によつて貫かれてゐたことは、以上の瞥見からも容易に導きうる結論である。彼も亦「悔悟せる貴族」の一人として、その精神の系譜は、サルトイコフシチェードリンやウスペンスキイなど所謂七〇年代の人民派作家に、

直接のつながりを持つてゐる。しかも彼がやうやく青年期を迎へたときは既に、人民派の理想の夢は早くも農民の現實の姿のうへに幻滅を味つてゐたのであるし、ついで八〇年代に入ればあの確信的な反動家ポベドノースツェフの強力な弾壓に、あらゆる希望は根こぎにされるのである。それは抒情詩人ナドソンによつて、

花は散りうせ火は燃えつきた

底しれぬ夜が墓穴のやうに暗い……

と歌はれた暗澹たる日々であつた。ガルシンの作家的生涯は、この幻滅と破産の一時代のうちにあわただしく開花しまた閉ぢたのであつて、この意味から彼を、もつとも純粹な八〇年代作家と呼ぶことができるであらう。

その三十三年の短い生涯を通じて完成された作品は二十篇に満たず、業績は決して大きくはないのであるが、しかも彼が永く愛慕される所以は、その病弱の身をもつてあの窒息せんばかりの空氣のなかに、一點の弱々しくはあるが曇りない良心の灯をよく守り通したところにある。このささやかな灯はやがて、コロレンコの不撓の實踐力や、チェーホフの魔のごとき現實直視の力によつて承け繼がれることになつたのを思へば、晩年の彼がこの二作家に篤い信頼を置いてゐたのも決して偶然ではないのである。

納本

昭和十二年九月十五日 第一刷發行
昭和二十五年十一月三十日 第八刷發行

紅い花
定價參拾圓



譯者 神西清
發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地 岩波雄二郎
印刷者 長野市岡田町一七六番地 田中重彌

發行所 東京都千代田區 神田一ツ橋二丁目三番地 株式會社 岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

大日本法令 印刷・製本

讀書子に寄す

岩波茂雄

—岩波文庫發刊に際して—

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。當ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に任せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繋縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種々の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

戰後既刊書目

新訓萬葉集 上巻 佐佐木信綱編	120	波	山本有三著	120		
新訓萬葉集 下巻 佐佐木信綱編	90	自然と人生 徳富蘆花著	90	田舎教 師田山花鏡著	60	
徒然草 西尾宣校訂	30	暗夜行路 前篇 志賀直哉著	90	河	童芥川龍之介著	30
源氏物語 (一) 島津久基校訂	60	暗夜行路 後篇 志賀直哉著	90	若山牧水歌集 若山喜志子選	90	
源氏物語 (二) 島津久基校訂	60	蓼喰ふ 蟲谷崎潤一郎作	60	赤彦歌集 齊藤茂吉選	60	
源氏物語 (三) 島津久基校訂	60	啄木歌集 石川啄木著	90	山椒大夫 他四篇 森田外作	60	
源氏物語 (四) 以下續刊全五冊		寺田寅彦隨筆集全五巻 小宮賢隆編	90	青	年 森田外作	60
平家物語 上巻 山田孝雄校訂	60	櫻の實の熟する時 島崎藤村著	60	文明論之概略 福澤諭吉著	60	
平家物語 下巻 山田孝雄校訂	90	侏儒の言葉 芥川龍之介著	30	土	上・下巻 長塚節作各	60
現代文學		白秋詩抄 北原白秋著	60	生	田山花鏡著	60
藤村詩抄 島崎藤村自選	60	銀の匙 中 勸助作	60	大鹽平八郎・塚事件 森田外作	30	
出家とその弟子 倉田百三著	60	千曲川のスケッチ 島崎藤村著	60	註文帳・白鷺泉 鏡花作	50	
		武藏 野國木田獨歩作	60	十三夜・われから他三篇 樋口一葉作	30	
		短篇集 萬曆赤繪 志賀直哉作	120	牛肉と馬鈴薯 他三篇 國木田獨歩作	30	
		小鳥の巢 鈴木三重吉作	90	こゝろ 夏目漱石著	50	
		福翁自傳 福澤諭吉著	120	茶の本 岡倉覺三著	30	
		小僧の神像 他十篇 志賀直哉作	60	坊つちやん 夏目漱石著	60	
				みみずのたはこと(上) 徳富健次郎著	60	

外國文學

みみずのはこと (下) 徳富健次郎著 90

キリシア・ローマ神話	バルフィンチ作	野上彌生子譯	150
改譯 罪と罰 第一卷	ドストエーフスキイ	中村白葉譯	90
改譯 罪と罰 第二卷	ドストエーフスキイ	中村白葉譯	90
改譯 罪と罰 第三卷	ドストエーフスキイ	中村白葉譯	90
知られざる傑作他五篇	バルザック作	水野亮譯	60
ラム沙翁物語	野上彌生子譯		120
女の一生	モトバツサン作	杉捷夫譯	90
アルプスの山の娘	ヨハンナ・スビリ作	野上彌生子譯	90
ボヴァリー夫人上巻	フロベール作	伊吹武彦譯	90
ボヴァリー夫人下巻	フロベール作	伊吹武彦譯	90
夏の夜の夢	シェイクスピア作	土居光知譯	60
ハムレット	シェイクスピア作	市河松浦譯	60
コロンバ	杉捷夫譯	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (一)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (二)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (三)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (四)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (五)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (六)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (七)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (八)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (九)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (十)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (十一)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (十二)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (十三)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (十四)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (十五)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (十六)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (十七)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (十八)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (十九)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (二十)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (二十一)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (二十二)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (二十三)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (二十四)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (二十五)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (二十六)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (二十七)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (二十八)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (二十九)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (三十)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (三十一)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (三十二)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (三十三)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (三十四)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (三十五)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (三十六)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (三十七)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (三十八)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (三十九)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (四十)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (四十一)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (四十二)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (四十三)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (四十四)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (四十五)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (四十六)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (四十七)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (四十八)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (四十九)	トルストイ著	中村白葉譯	60
アンナ・カレニナ (五十)	トルストイ著	中村白葉譯	60

赤と黒	中巻	スタンダール作	桑原生島譯	60
赤と黒	下巻	スタンダール作	桑原生島譯	90
貴冑集 隊	商	高橋健二譯		60
怪談	不思議な事の研究と物語	ラファエリ・ヘルツ	平井程一譯	60
メロンカ (十日物語)	(一)	ボツカチオ作		60
メロンカ (十日物語)	(二)	ボツカチオ作		60
メロンカ (十日物語)	(三)	ボツカチオ作		60
人と超人	市川又彦譯			100
南海千一夜物語	中村徳三郎譯			60
旅の日のモーツァルト	石川敏次譯			30
陽気なタルタラン	小川泰一譯			60
月曜物語	櫻田一徳譯			80
スベードの女王 (他一篇)	神四清譯			30
トルストイ日記抄	除村吉太郎譯			60
フアウスト第一部	ゲテ譯			90
フアウスト第二部	ゲテ譯			120
青い鳥	若月紫蘭譯			60
四人の少女 第一部上	オールコット作			60
四人の少女 第一部下	オールコット作			60
四人の少女 第二部上	オールコット作			60
四人の少女 第二部下	オールコット作			60
老境について	吉田正通譯			30
戦争と平和 (一)	トルストイ作			60
戦争と平和 (二)	トルストイ作			60
戦争と平和 (三)	トルストイ作			60
戦争と平和 (四)	トルストイ作			60
戦争と平和 (五)	トルストイ作			60
戦争と平和 (六)	トルストイ作			60
戦争と平和 (七)	トルストイ作			60
戦争と平和 (八)	トルストイ作			60
光あるうちに	光の中を歩め	トルストイ作		30
お氣に召すまま	阿部知二譯			60
詩と眞實 第一部	小牧健夫譯			90
詩と眞實 第二部	以下續刊金四冊			60
箴言と考察	ラ・ロシュコフ著			60
ワーズワース詩集	田部重治譯			60
屋根裏の哲人	スウツェストル			60
アベラールとエロイーズ	中尚志譯			120
ギリシア抒情詩選	茂一譯			50
アルルの女	ドビュッシー作			30
セヴィエ夫人手紙抄	井上宛一譯			60
即興詩人	アンデルセン作			60
感情教育	上中下	生島道一譯		60
紅樓夢 (一)	曹雪芹作			60
紅樓夢 (二)	曹雪芹作			90
紅樓夢 (三)	曹雪芹作			90
紅樓夢 (四)	曹雪芹作			120
紅樓夢 (五)	曹雪芹作			60
紅樓夢 (六)	曹雪芹作			60
紅樓夢 (七)	曹雪芹作			60
紅樓夢 (八)	曹雪芹作			60

紅樓夢 (九) 曹雪芹作 松枝茂夫譯 60	紅樓夢 (十) 以下續刊全十四册	カラマーゾフの兄弟 第一卷 ドストエフスキイ 米川正夫譯 120	カラマーゾフの兄弟 第二卷 ドストエフスキイ 米川正夫譯 90	カラマーゾフの兄弟 第三卷 米川正夫譯 120	カラマーゾフの兄弟 第四卷 ドストエフスキイ 米川正夫譯 120	死せる魂 上中下 平井雄雄譯 各60	アンデルセン 童話集 (一) 大畑末吉譯 60	アンデルセン 童話集 (二) 大畑末吉譯 60	アンデルセン 童話集 (三) 大畑末吉譯 60	アンデルセン 童話集 (四) 以下續刊全十册	三つの物語 フロロベール作 山田九朗譯 60	農 民 上・下巻 水野亮譯 各90	ロシヤ文學評論集 I ベリンスキイ作 除村吉太郎譯 60	ロシヤ文學評論集 II 除村吉太郎譯 60	マノン・レスコー マベ・フレグオ作 河盛好藏譯 60	脂 肪 の 塊 モーパッサン作 水野亮譯 30	未來のイヴ 上巻 リラダン作 渡邊一夫譯 60	未來のイヴ 下巻 リラダン作 渡邊一夫譯 90	トオマス・マン短篇集 I 實吉捷郎譯 60	トオマス・マン短篇集 II 實吉捷郎譯 60	自然科学・哲學・宗教 教育・美術・歴史 波多野精一譯 宮本和吉譯 60	純粋理性批判 上巻 イマヌエル・カント 天野貞祐譯 120	純粋理性批判 下巻一 イマヌエル・カント 天野貞祐譯 90	純粋理性批判 下巻二 イマヌエル・カント 天野貞祐譯 90	エミール 第一巻 平林初之輔譯 30	エミール 第二巻 平林初之輔譯 30	エミール 第三巻 平林初之輔譯 30	エミール 第四巻 平林初之輔譯 90	エミール 第五巻 平林初之輔譯 60	人間不平等起原論 本田喜代治譯 60	グセラエー 西洋折衷史 上巻 谷川徹三譯 90	グセラエー 西洋折衷史 下巻 松村一人譯 90	死に至る病 キエルケゴール著 齊藤信治譯 60	人生論 トルストイ著 中村白葉譯 60	人間機械論 ドラ・トリイ著 杉 捷夫譯 30	言語活動と生活 シヤルル・バイイ著 小林英夫譯 90	カント 永遠平和の爲に 高坂正顯譯 30	判断力批判 上巻 イマヌエル・カント 大西克禮譯 90	判断力批判 下巻 イマヌエル・カント 大西克禮譯 90	マツヘル宗教論 佐野勝也譯 90	マツヘル宗教論 石井次郎譯 90	マツヘル宗教論 多田英次譯 90	省 察 デカルト著 三木清譯 60	甲陽軍鑑 (一) 古川哲史校訂 60	甲陽軍鑑 (二) 以下續刊全三册	將來の哲學の根本問題 植村善六譯 60	ランケ世界史概観 鈴木成高譯 90	ヘーゲル 哲學の批判 他一篇 佐野文夫譯 30
-----------------------	------------------	----------------------------------	---------------------------------	-------------------------	----------------------------------	--------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	------------------------	------------------------	-------------------	------------------------------	-----------------------	----------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-----------------------	------------------------	-------------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	---------------------	------------------------	----------------------------	----------------------	-----------------------------	-----------------------------	------------------	------------------	------------------	-------------------	--------------------	------------------	---------------------	-------------------	-------------------------

人間悟性論 上巻 ジョン・ロック著 加藤那一郎譯 90	人間悟性論 下巻 ジョン・ロック著 加藤那一郎譯 60	フラデー力と物質 稻沼瑞穂譯 60	學問のすゝめ 福澤諭吉著 60	ローマ史論 第一巻 マキアベエリ著 大岩 誠譯 60	ローマ史論 第二巻 マキアベエリ著 大岩 誠譯 60	ローマ史論 第三巻 マキアベエリ著 大岩 誠譯 90	唯一者とその所有 上巻 ステルネル著 草間平作譯 60	唯一者とその所有 下巻 ステルネル著 草間平作譯 90	唯一者とその所有 中巻 ステルネル著 草間平作譯 90	キリスト教の本質 上巻 フォイエルバッハ著 船山信一譯 90	キリスト教の本質 下巻 フォイエルバッハ著 船山信一譯 90	マリアの讃歌 他一篇 マルティン・ルター 石原吉村譯 60	全知識學の基礎 上巻 フイヒテ著 木村素衛譯 60	全知識學の基礎 下巻 フイヒテ著 木村素衛譯 90	歎 異 抄 金子大榮校訂 30	テアラ蠟燭の科學 矢島祐利譯 30	幸 福 論 草間平作譯 60	文化科學と自然科學 リツケルト著 豊川・佐竹譯 60	眠られぬ夜のために ヒルテイ著 第一部上巻 草間平作譯 60	眠られぬ夜のために ヒルテイ著 第一部下巻 草間平作譯 60	眠られぬ夜のために 以下續刊全四册 第二部上	社會科學・法律 社會・政治・經濟 平林初之輔著 60	民 約 論 平林初之輔著 60	ラッサ労働者綱領 小泉信三譯註 30	家族・私有財産及び國家の起源 西 雅雄譯 60	賃銀・價格および利潤 長谷部文雄譯 30	賃労働と資本 カール・マルクス著 長谷部文雄譯 30	空想より科學へ エンゲルス著 大内兵衛譯 30	權利のための闘争 イエーリク著 日沖憲郎譯 30	フォイエルバッハ論 エンゲルス著 佐野文夫譯 30	貧 乏 物 語 河上 肇著 大内兵衛譯 60	マルクスゴータ綱領批判 西 雅雄譯 30	住宅問題 エンゲルス著 大内兵衛譯 60	近代民主政治 全四巻 松山武義譯 各90	カール・マルクス 資本論 (一) エンゲルス編 向坂逸郎譯 90	カール・マルクス 資本論 (二) エンゲルス編 向坂逸郎譯 90	カール・マルクス 資本論 (三) エンゲルス編 向坂逸郎譯 120	カール・マルクス 資本論 (四) 以下續刊全十三册	經濟學及課税之原理 小泉信三譯 120	犯罪と刑罰 ベツカリア著 風早八十二譯 60	デモクラシーの本質と價值 ハンス・ケルゼン著 西島芳二譯 60	日本の下層社會 横山源之助著 60	君 主 論 マキアベエリ著 黒田正利譯 60	國 富 論 (一) アダム・スミス著 大内兵衛譯 120	國 富 論 (二) アダム・スミス著 大内兵衛譯 120	國 富 論 (三) アダム・スミス著 大内兵衛譯 120	國 富 論 (四) アダム・スミス著 大内兵衛譯 120	國 富 論 (五) アダム・スミス著 大内兵衛譯 90	マルクス初版人口の原理 大内兵衛譯 60
-----------------------------	-----------------------------	-------------------	-----------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	--------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	---------------------------	---------------------------	-----------------	-------------------	----------------	----------------------------	--------------------------------	--------------------------------	------------------------	----------------------------	-----------------	--------------------	-------------------------	----------------------	----------------------------	-------------------------	--------------------------	---------------------------	------------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------------------	----------------------------------	-----------------------------------	---------------------------	---------------------	------------------------	---------------------------------	-------------------	------------------------	------------------------------	------------------------------	------------------------------	------------------------------	-----------------------------	----------------------

既刊書目(續)

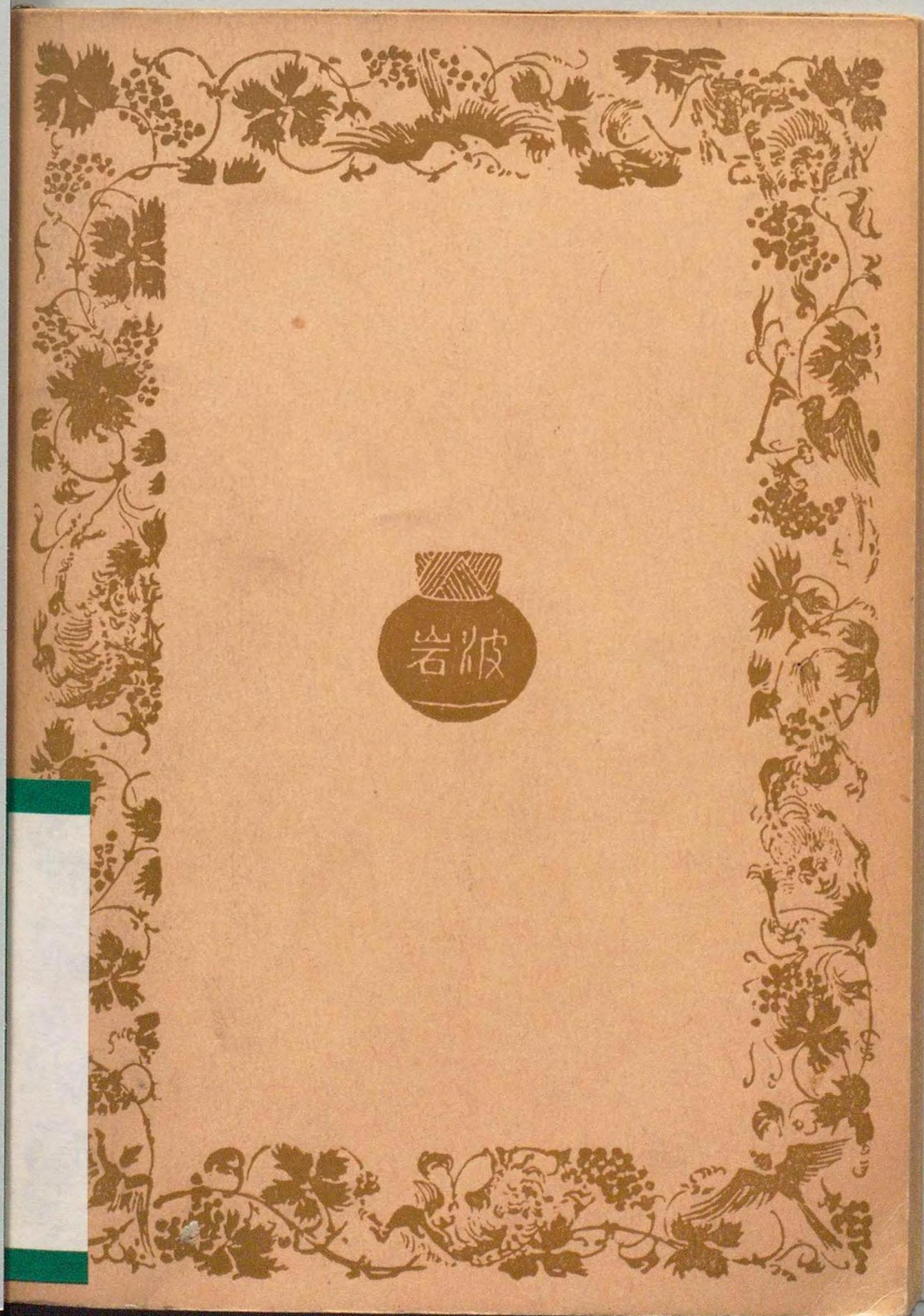
新訂 芭蕉俳句集 巖原退藏校註	90	方丈 記 山田孝雄校訂	30	藤原定家歌集 佐佐木信綱校訂	90	新 春 徳富健次郎著	60	病牀六尺 正岡子規著	60	盗 芥川龍之介著	30	草 枕 夏目漱石著	60	蒲團・一兵卒 田山花袋作	30	瀧口入道 高山樗牛作	30	虞美人 草夏目漱石著	120	小 さき者へ。 生れ出づる惱み 有島武郎作	30	浮雲 二葉亭四迷作	60	五重塔 幸田露伴作	30	にこりえ・たけくらべ 樋口一葉著	30												
子規歌集 正岡子規著	30	春を待ちつつ 島崎藤村著	30	自秋抒情詩抄 北原白秋著	60	雁 森 四外作	30	三 四 郎 夏目漱石著	60	それか ら 夏目漱石著	60	門 夏目漱石著	60	子規句集 高濱虚子選	90	羅生門・鼻・芋粥 芥川龍之介作	30	煤 煙 森田草平作	90	生まざりしならば 正宗白鳥著	30	そ の 妹 武者小路實篤著	30	春夫詩 鈔 佐藤春夫著	60	多情佛心前後篇 里見 彌作各	90	死刑囚最後の日 ユーゴー作	60	豊島與志雄 譯	30	三人姉妹 チェーホフ作	30	湯浅芳子 譯	30	クロイツェル・ソナタ トルストイ作	60	米川正夫 譯	60
結婚の幸福 トルストイ作	60	ミル自傳 西本正美 譯	90	カルル・メン 杉 捷夫 譯	30	あしながおごさん 遠藤喜子 譯	90	王子と乞食 村岡花子 譯	60	椿 吉村正一 譯	90	ジークル博士と 石田良吉 譯	30	みづらみ 他三篇 關 泰祐 譯	30	クレイヴの奥方 ラファエッティ夫人作	60	「絶対」の探求 水野 亮 譯	90	メゾン・テリエ 他三篇 モーパッサン 著	30	リ ア 王 齋藤 勇 譯	90	懺悔録 上中下 石川 龍 譯	90	黄金寶壺 ホフマン 著	30	アドルフ フ コンスタン 著	30	オニ 限りなきいのち 井上 英 譯	30	オニ 奇妙な墓間狂言 石井 英 譯	90	オニ 英 譯	90				

あだ花 他二篇 モーパッサン 著	30	セヴィラの理髪師 ボーマルシエ 著	30	大尉の娘 プーシキン 著	60	白百合を紅い薔薇に ケラ 著	90	骨董 年井 著	60	戯れに戀はすまじ 進藤 誠一 著	30	ロミオと ジュリエットの悲劇 本多 顯 著	60	黒馬物語 山田昌司 著	90	ラフカディオ・東文選評論 十一谷 義三郎 著	90	雨 傘 他七篇 モーパッサン 著	30	復 活 上巻 トルストイ 著	90	復 活 中巻 トルストイ 著	60	復 活 下巻 トルストイ 著	60	海邊の悲劇 他三篇 水野 亮 著	30	阿片常用者の告白 田部 重治 著	30	ドミニック フロマンタン 著	120	市原 豊太 著	120	未 成 年 (上) ドストエフスキイ 著	120	米川 正夫 譯	120
未 成 年 (中) ドストエフスキイ 著	90	未 成 年 (下) ドストエフスキイ 著	120	酒 樽 他六篇 モーパッサン 著	30	伊太利紀行 上巻 相良 守 著	80	伊太利紀行 中巻 相良 守 著	90	伊太利紀行 下巻 相良 守 著	120	トム・ソーヤーの冒険 石田 英二 著	120	イン・メモリアム 入江 正 著	60	ワンダ・ブツク 三宅 義三郎 著	60	千一夜物語 (一) 豊島 與志雄 著	60	千一夜物語 (二) 豊島 與志雄 著	60	千一夜物語 (三) 豊島 與志雄 著	60	どおりなきりしたん 海老 岩 有 道 校 註	30	善 の 研 究 西田 幾多郎 著	60	哲 學 の 慰 め 中村 健三 著	60	余は如何にして 基督 信徒 となりし乎 鈴木 健三 著	90	鈴木 健三 著	90				
ジイ・スマ心理學上・下 今田 憲 著	90	求 安 録 内村 健三 著	30	代表的日本人 内村 健三 著	60	隠者の夕暮 シュンクンツ 著	60	イ エ ス 傳 津 田 謙 著	120	習 慣 論 ラヴェツソン 著	30	フアラ 昆蟲記 第一 山田 吉彦 著	90	フアラ 昆蟲記 第二 山田 吉彦 著	60	フアラ 昆蟲記 第三 山田 吉彦 著	60	フアラ 昆蟲記 第四 山田 吉彦 著	60	フアラ 昆蟲記 第五 山田 吉彦 著	60	フアラ 昆蟲記 第六 山田 吉彦 著	60	伊太利文藝 復興期の文化 上巻 村松 恒一 著	90	伊太利文藝 復興期の文化 下巻 村松 恒一 著	90	基督 信徒 の なぐさめ 内村 健三 著	30	富に關する省察 チュルゴフ 著	30	永田 清 譯	30				

最新刊書

吉野葛・蘆刈	谷崎潤一郎作	30
宮澤賢治詩集	谷川徹三編	90
蟹工船・一九六、三、一五	小林多喜二作	60
水滸傳	第五册 吉川幸次郎譯	60
紅樓夢	(三) 高蘭 松枝茂夫譯	60
あらし	シニクスピア 豊田實譯	60
人間論	ポウ 上田勤譯	60
高慢と偏見	下卷 オースティン 富田彬譯	90
ドイツ・コパフィールド	(二) デイケン 市川又彦譯	90
ハインエの本	井上正麿譯	60
ペルシア人の手紙	(上) モンテスキュー 大岩誠譯	60
ペルシア人の手紙	(下) モンテスキュー 大岩誠譯	60
或る女への手紙	上卷 江口清譯	90

改譯 椿	改譯 姫	90
死の如く強し	デユマ・フィス 吉村正一郎譯	90
家族の記録	モイパッサン 杉捷夫譯	90
ピノックキオ	黒田辰男 阿クサーコフ作	90
スイスのロビンソン	上 柏熊達生 宇多五郎譯	90
千一夜物語	(五) 豊良・佐藤・渡邊譯	60
ローマ帝國衰亡史	(一) ギボ 村山勇三譯	90
フアブル昆蟲記	第八分册 山田吉彦譯	60
改譯 プラトンク	ソクラテスの辯明 久保勉譯	30
啓蒙とは何か	他三篇 篠田英雄譯	30
ガーンデール聖書	エルベール 蒲田正吾譯	30
改譯 地代論	山口正吾譯	90
ロシヤにおける革命	思想の發達についで 金子幸彦譯	60
カール・資本論	(五) エンゲルス 向坂逸郎譯	60



岩波